

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Representing Colonialism and Nationalism in the Korean Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 全, 京秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004102">https://doi.org/10.15021/00004102</a>

## 韓国博物館史における表象の政治人類学

——植民地主義，民族主義，そして展望としてのグローバリズム——

全 京 秀\*

### Representing Colonialism and Nationalism in the Korean Museum

Kyung-soo Chun

博物館の概念は西洋における帝国主義及び植民地主義の拡大という脈絡とは無縁ではありえない。朝鮮総督府博物館は1915年に朝鮮王宮跡地に創設され、しかも博物館の名称自体が、植民地の民族に対する支配を明白に示していた。これを「植民地主義博物館」と私は呼びたい。

前者と対照をなす「民族主義博物館」は、米国軍政府の援助のもとでの独立と共に、最終的に建物・機構ともに前者に取って代わった。この博物館は1950年の朝鮮戦争の直前にソウルの人類学博物館と合併した。この意味ではこの博物館は、異文化を展示するという人類学的内容をもっていたわけである。

植民地時代には民族を支配するために、独立以降は民族とその政府にとって、古くからの由来や文化的価値、そして政治的正統性を提示することで、博物館は少なくとも植民地主義的利益と民族主義的利益のために尽くしてきたのである。

21世紀にはグローバリズムというキーワードが世界の中で我が国の博物館を示していく主要な課題となるかもしれない。

The idea of a museum cannot be divorced from the context of Western imperialism and colonial expansionism. The Government-General Museum of Korea (Chosen Sotokufu Hakubutsukan) was established in 1915 on the site of the Korean Palace with even the name of the museum carrying overtly the meaning of domination over the people in the colony. This was the colonialist museum, as I like to call it.

The nationalist museum by contrast eventually replaced the former in terms of the building as well as organization with independence under

---

\* ソウル大学人類学科

**Key Words :** Korea, museum, colonialism, nationalism, political anthropology  
キーワード：韓国，博物館，植民地主義，民族主義，政治人類学

the auspices of the US military government. The museum incorporated the Museum of Anthropology in Seoul just before the Korean War of 1950. In this sense, between the colonialist era and the war the museum was carrying the content of anthropological ideas regarding other cultures.

Thus the museum has at least as often served colonialist as well as nationalist interests, providing evidence for the antiquity, cultural merit, and political legitimacy for ruling the people during colonial days as well as of a people and their government since independence.

In the 21st century, the key-word “globalism” could be the main issue in formulating our museums in the world.

- |                                 |                                     |
|---------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 序——理論と問題——                   | 4. 民族と国家の文化政治学<br>——文化の再脈絡化（Ⅱ）——    |
| 2. 歴史の隠蔽と捏造の政治学<br>——文化の脱脈絡化——  | 5. グローバル化と未来化の博物館文化学<br>——文化の原脈絡化—— |
| 3. 開拓と植民の支配哲学<br>——文化の再脈絡化（Ⅰ）—— | 6. 結語——新しい博物館のために——                 |

## 1. 序——理論と問題——

文化とは、人間の行い絶え間なき再創出 (reinvention) のプロセスであり、それゆえ伝統の再創出が可能であると同時に、文化の強制的な変造も可能となる。博物館は文化を再創出する近代の強力な装置であり、それゆえ博物館を舞台とした文化的プロセス (cultural process) ——文化を再創出するプロセス——を跡づけることは、博物館研究にとどまらず、人類学的な文化理論に対しても、寄与するところが大きいであろう。

文化はまた記憶の蓄積であり、それを参照しないかぎり、文化はその全貌を顕わさない。個人の行動を記憶の累積に関連させて解釈することは、文化理論をきわめて心理学的な還元論へと導く可能性があるが、この観点に依拠せずには、社会的な広がりをもった文化的プロセスの理解が困難であることは明らかである。諸個人の实践は、彼らが属している集団の歴史（つまり集合記憶の累積）へと、また適応を通して周囲の自然環境へと、脈絡化 (contextualize) されている。それゆえにこそ、文化を再創出する実践は、文化的プロセスの記憶（つまり歴史）をも再創出しようとする。それ

では、このような文化的歴史の再創出は、どのような脈絡 (context) で行われるのであろうか。博物館が国民史に関わる文化表象を提示するそのプロセスを考察しようとする最大の課題は、この脈絡を明らかにすることにある。

「博物館とは、それを管理する国家の集合記憶 (collective memory) と密接に関連している制度である」(Zolberg 1996: 76)。記憶のなかには、互いにぶつかり合うものもあり、忘れてしまいたいものもあり、過度に強調して誇示したいものもある。本質的に異なった記憶の数々は、博物館という一つの空間のなかで、十分に競争関係におかれうる。どの記憶を展示するかという問題がまさに国家のヘゲモニーと直結するというフーコー (Foucault 1977) の論理が説得的であるのは、事実として、記憶の選択権を究極的には国家権力が握っているからである。

私の関心の焦点は文化表象の脈絡という問題にある。本論文ではこの観点から、韓国の博物館における文化的プロセスの展開を中心に、歴史的なアプローチを通して、韓国社会における博物館現象を考察してみたい。韓国社会に存在した、そして現に存在している、博物館という文化現象を通時的に分析することは、韓国社会の文化変動に照明を当てるのみではない。韓国博物館の経験を通して、博物館という制度が抱えている本質的な問題と、その問題解決について、提言が可能だと考える。博物館は、一つの国家社会の「顔」であり、博物館が提示する文化表象は、特定の社会に特殊なレベルでのみならず、文化の普遍的なレベルにおいても、一つの鏡としての役割を果たすことができるはずである。

韓国における博物館の歴史的展開を考慮しようとする本稿では、分析のための操作的な枠組みとして、この展開を3段階に分け、各段階ごとに時代的脈絡と関連させて分析する努力を行う。博物館は日本植民地時代に植民地支配者によって開始され、解放後はそれに対する政治的反発から民族主義的な展開があった。いままさに迎えようとしている新しい世紀への期待は、博物館に対してまったく新しい立場と役割を要求している。それゆえ本稿の議論には、博物館の歴史的分析を基盤として、将来に向けた提言を行おうとする意図も込められている。

以上を踏まえて、本稿は初めに植民地主義と結合した文化の脱脈絡化 (decontextualization) と再脈絡化 (recontextualization)、次に民族主義と結合した文化の再脈絡化、最後に将来のグローバル化時代を指向する文化の原脈絡化 (proto-contextualization) という枠組みを立てる。そして、この枠組みに従って資料を分析し、韓国博物館史を描きだそうとした結果が本稿である。20世紀という約1世紀の間に、韓国でなされてきた博物館をめぐる言説を組み上げることによって、今後博物館が進んでい

くべき方向について、一つの提言をしてみようと思う。グローバル化と未来化（futurization）の修辞学を具体的に博物館でどのように実践として展開させることができるのか。それをめぐる一つの試論でもある。

「民族的アイデンティティを形成しうるのも、また抹殺する力となりうるのも、まさに博物館である。一部の人々はこれを認めようとしなかった。それだけ、博物館は明らかに政治的である」（Kaepler 1994: 21）。博物館は権力や政治とは関係のない存在であるという認識が、一般的には通用している。しかし、博物館の内部では強力な政治が作用している。政治的な場としての博物館という性格を見逃すならば、博物館の本質を理解したことにはならない。本稿の論議は、博物館という制度がもつさまざまな性格あるいはレベルのなかで、主に政治的な含意を中心に限定していることをはじめに断っておく。

## 2. 歴史の隠蔽と捏造の政治学——文化の脱脈絡化——

歴史を消したり、変えたりすることができると思っている人々が、歴史を思うままにしてきた事例は数多い。植民地主義的、帝国主義的な侵略の過程には、集合記憶を操作するという実験が大規模に行われた歴史がある。そのような操作や侵略の過程から蓄積された記憶としての文化は、また別の方向の脈絡化を経験することになる。このプロセスを考えるのが文化変動である。そして、文化の担い手の経験とはまったく関係のない集団が、侵略と支配の目的で現地の人々の文化を脱脈絡化することを文化植民地主義または文化帝国主義と呼んできた。博物館、とくに植民地や第三世界で建設されてきた博物館が、このような文化植民地主義と切っても切れない関係にあることは歴史的事実である。

記憶を変造する方法はさまざまである。個人を洗脳するために緻密な技術が動員されることもあり、集団を対象とする操作と隠蔽の方法もある。文化表象の操作と隠蔽は究極的には集団の洗脳である。政治的支配は、洗脳と操作、そして隠蔽というプロセスを通して、記憶を支配しようとする。他人の記憶を支配するならば、それは完璧な文化的支配になり、それと同時に政治的ヘゲモニーを掌握するというわけである。以上のような一連のプロセスを記憶の政治学（memory politics）と名付けたい。

武断政治から始まった日本帝国主義の朝鮮に対する植民地支配は、経済的搾取に続いて文化的支配へと、当然の展開であるかのごとくに展開していった。そして私は、その始まりがまさに博物館の出現にあったと考えている。武断的な統治の限界は三・

一運動によって知られるところであり、その対策として文化的レベルでの統治が強化されたというのが通説である。しかし、武断統治の過程でもすでに文化統治の手段が用いられていたことは、博物館の出現が裏付けていると主張することが可能である。

日本の植民地統治の初期段階から、武断統治とともに文化統治が始まったという解釈がより現実的ではなかろうか。武断政治から文化政治への転換は、機械的に区分しうる政治体制の転換ではなく、三・一運動以後に文化政治が強化されたという方向で解釈したいというのが、私の立場である。武断政治と文化政治が時期ごとに区別して行われていたという解釈には無理があり、時期ごとの特殊な状況にしたがって、いずれの部分がより強化されていたのかという観点で、植民地の統治政策を検討していくべきであると考えます。

日本帝国主義の朝鮮に対する文化的支配は、内鮮一体論と停滞性論を論理の二本柱としていた。これはすでに学界で検証が終わっているところである。それを物質的な証拠によって提示し、その論理を深化させようと試みたのが、1915年に登場した朝鮮総督府博物館であると考えます。

「朝鮮総督府博物館は、1915年に景福宮内で催された総督府始政五周年記念物産共進会の終了後、その美術館を〈本館〉にして12月1日に開館した。(中略)洋風の二階造りであるが、(中略)初めから館蔵品を収容できなかった。そこで〈本館〉には主要陳列品を展示するにとどめ、〈事務室〉には慈慶殿という景福宮遺存の朝鮮式居殿をあてた。景福宮の正殿であった勤政殿の背後(北)に並ぶ思政殿・萬春殿・千秋殿と回廊は倉庫に転用され、修政殿は大谷光端師ら西域探検隊の収集品の展示場になっていた。大宴会場であった重層の慶会楼も朝鮮各地から搬入の石造の塔・碑・灯を並べた殿堂跡も観覧区域内に含まれ、博物館の敷地はすこぶる広大であった。(中略)当時の朝鮮総督府博物館は①博物館の経営、②朝鮮各地で発見される埋蔵文化財の処理、③古蹟および古建築物の修理保存、④朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令による指定などの業務をあわせ行なっていた。これだけの仕事を約10名の館員で処理していた(中略)行政機構上は学務局社会教育課の係の一つにすぎなかった」(有光 1997: 178-179)。朝鮮王朝の宮殿である景福宮で物産共進会を開催するという発想自体が植民地支配者の認識であり、その認識は経済的な搾取によって始めて可能であった。皇室の中心である宮殿を、収集してきた遺物の倉庫として使用したことは、さらなる支配と統治の論理によって可能であったといえる。立場をかえて、京都の御所を博覧会場専用に使ひ、そこを博物館の遺物倉庫にすると主張したら、果たしてそのような発想や主張は日本国内で可能だったろうか。

植民地の各地から集めた遺物は、すでに収集される段階で本籍地から引き離された。この行為が進んでいく間にも、文化財の意味は大幅に変化させられている。こうして意味を変化させられた文化財を保管するための倉庫として、宮殿を使用することは、ある意味で象徴的行為である。朝鮮の地方にあった歴史的な遺物と宮殿という、互いに全く異なる意味をもつ対象物を、象徴過程で競争させる構図をつくったのである。

朝鮮王朝の統治時代に地方できちんと保管されなかった遺物を、日本の植民地政府がきちんと保管するために、もっとも安全な宮殿に祀りあげるという論理が立てられた。支配と被支配の様相が変化してしまった植民地の状況で、新たな支配者が、過去の支配者から支配を受けていた対象物を救済するという、脈絡の再構成が生じたのである。植民地統治の一環としての文化事業が宮殿を博物館に利用したのは、支配の論理に立脚したものである。

日本の本国では思いもつかなかった王陵の発掘を植民地で盛んに行った。朝鮮古代文化を研究する名目で考古学の実験の場、すなわち発掘の練習場として利用したのである。日韓両国間の古代文化が密接な関係をもっているため、日本でできない大規模な王陵の発掘を朝鮮半島で実施することによって、学問研究の代替効果も狙ったのである。

博物館という制度と建物自体がまさに権力と支配、そしてヘゲモニーの表象であることは、韓国で最初につくられた朝鮮総督府博物館と、それが建設される進行過程からはっきりと論証される。博物館による文化的支配を支配権力が意図したのか、まったく意図しなかったかについては、論議する必要がない。なぜなら、かりに意図しなかった実践過程からそのような結果が生まれたのなら、博物館と支配権力との関係がますます明白になるからである。博物館という制度は、存在それ自体として政治的側面の論議を避けることができないと考える。

朝鮮総督府博物館の経営方針と具体的な陳列方法から、隠蔽と捏造の陰謀を指摘することができる。隠蔽と捏造の手段はもともと明示的なものではなく、隠密に行うものであり、表面は美辞麗句で飾られている。しかし、その意図するところの本質は隠すことができない。万一、隠蔽と捏造のプロセスを公にさらけだしていれば、それは恐喝と脅迫になるだろう。

総督府博物館の経営方針は、「半島古来の制度、宗教、美術、工芸、其他歴史の徵証参考となるべきものを集め、半島民族の根原を尋ねて其の民族性を明にし、特に此の地に発達して来た工芸美術の特質を調査して広く世界に紹介し、優秀なる芸術品を陳列して新たなる工芸美術の勃興に資せんと欲するものである。(中略) 国民の自覚

心の誘導に努めたいと心掛けて居る」(博物館報 第1号, 1926年4月, p. 3.)。植民地支配者は、朝鮮文化の精粹を工芸美術という部分に縮小して局限させようとする意図を、排除することができない。「国民」とは「皇国臣民」を指す。植民地の朝鮮人を日本の「天皇」の臣民にすると同時に、内地日本人と同じアイデンティティをもたせるという目的が明示されている。

陳列室の配置にも朝鮮半島の歴史を縮小しようとする意図がはっきりと現れている。「第1室(中央広間) 仏教遺物, 第2室(東下) 三国時代および新羅統一時代, 第3室(西下) 高麗時代および李朝時代, 第4室(西上) 楽浪帯方時代, 第5室(廊下) 特殊品陳列, 第6室(東上) 書画」。このうち、とくに第5室の特殊品陳列の内容は、石器, 土器, 骨角器, 石剣, 銅剣, 銅鉞, 前漢時代銅器, 高麗時代青銅鏡, 朝鮮活字などである。修政殿には、久原房之助の寄贈品と京都西本願寺法主の大谷光端師が中央アジアで発掘したものが陳列されていた(館報 1(1):14)。日本と同じ時代と判定できる旧石器や新石器時代の遺物を含む先史時代の痕跡と、日本列島より時期的に早いものと考えられる青銅器と鉄器の遺物, そして世界的に最先端な歴史を示している活字といった遺物をすべて一室に混ぜあわせて陳列している。そこには、隠蔽の論理が作用していたのに違いない。

西域からもってきた収集品を除けば、陳列室は朝鮮の歴史が三国時代から始まったとするイメージを強制するものである。朝鮮の歴史の始まりは、明らかに先史時代の遺物によって証拠づけられていた。「半島民族の根源を明らかにする」という経営方針に反して、三国時代以前の遺物に特別な陳列室を用意しなかったのは、半島の歴史を意図的に縮小しようとするものであった。このような植民地主義的な博物館の意図に反発した民族主義的な博物館の最大業績とされているものが、先史時代の遺物の発掘, 研究, 展示である。現在の国立中央博物館は過去の朝鮮総督府博物館を継承しながらも、もっとも画期的な改革を行ったセクションがこの先史時代のセクションであり、このセクションのための研究者を養成するのに考古学を奨励する努力が集中的に行われた。

朝鮮総督府以外に規模の大きな博物館として、1908年に設立された李王家博物館(別称、皇室博物館)があった。李王家博物館は、「朝鮮古今の美術, 土俗品等一萬数千点を蔵し之れを旧昌慶宮の遺址である, 朝鮮古式の宮殿建物(明政, 景春, 欽慶通明の各殿)及1911年に築造せる中央高台の博物館に陳列して」(博物館研究 8(4):10)いる。国を失わせた主人公が骨董品の上にあぐらをかいているような構図である。総督府は廃位された王室を慰撫する政策の一環として昌慶宮を苑に降格し、そこに動植



物園を付設した。骨董品や動植物でも鑑賞しながら幽閉されて過ごせという意味である。その結果、李王家は最大の骨董品所有者となった。「中央高台」の建物とは蔵書閣である。なお、ここで資料源として参照する『博物館研究』は、文部省社会教育局内にあった日本博物館協会が発行したものである。

「朝鮮の古美術品を収集陳列せる昌慶苑の李王家博物館は、その陳列館が所々に在してゐるため観覧上不便少からざるのみならず、(中略)新館の建築を要望(中略)1933年徳寿宮が公開されて、同宮域内の石造殿に近代日本美術品を常設陳列(中略)徳寿宮石造殿に隣接して、(中略)1936年8月建築工事に着手し、1938年3月竣工を見たのである。(中略)徳寿宮内の石造殿とこの新館を併せて名称も李王家美術館と改め、(中略)朝鮮古美術品の集大成と謂ふも過言でなく、同時に石造殿に於ける明治・大正以来現代日本美術の精華を観覧し得るに至ったことは半島文化の啓発向上に資すること大なるものがある」(博物館研究 11(7-8):1)。博物館や美術館を通した朝鮮王家と日本文化の結合を試みたのである。李王家美術館という名称の下に明治と大正の現代日本美術品を展示することは、この美術館固有の展示品である朝鮮古美術品と日本現代美術品を展示のうえて結合させようとする試みであり、観覧者に対しても内鮮一体の視覚をもつように誘導する意図を含んでいる。

日本帝国主義者は、占領軍の平定した朝鮮の王宮である景福宮の一部を壊して、総督府の庁舎を建て、その一部を総督府博物館の敷地にした。1910年に併合され日本の植民地となった大韓帝国(旧朝鮮)の景福宮に、1915年総督府博物館が建てられた。植民地の人民に対する善意の政策を標榜し、植民地化と占領を正当化する手段として博物館を利用した事例である。支配者である王を排除し、その王のかつての所在地を博物館にする。つまり、王不在の美しき朝鮮を描く場に変換することによって、政治的支配を正当化しようとしたのである。少なくとも支配者の交代によって人民が損害を受けることはないということを知らしめようとする高度な政治的意図が隠れている。それが植民地と博物館の相関関係なのである。

韓国における博物館という制度は、韓国に住んでいた人々はそれが何であるかも知らないまま、植民地支配者によって始められた。韓国において博物館というものが最初からペールに包まれたままで登場し、それをペールに包んで登場させた張本人だけが知ることのできる存在として始められたのである。

朝鮮半島に対する日本の経済的支配はすでに19世紀末から始まった。外交軍事的支配は1905年の日韓保護条約から始まり、1910年の政治的支配が始まると韓国は日本の植民地になった。1915年の総督府博物館は政治的支配に続いて登場した文化的支配と

いえる。支配構造の完結するところは文化、すなわち精神的な産物にあったと思われる。そのように博物館は植民地的支配と密接な関係をもって韓国で始まったのである。博物館は文化的支配の表象を盛り込んでいるのである。

隠蔽と捏造は、植民地である朝鮮半島内だけで進められたのではなく、必要によっては朝鮮半島の遺物を本国に幽閉させた場合もあった。いいかえれば植民地に建設された博物館というものは、より大きな次元の植民地支配政策の延長線上で現れたものであることが分かる。支配のために見せなければならぬものは、目に入りやすい博物館に展示するという戦略を用い、見せることが支配の邪魔になりうるものは、植民地の被支配者の目に触れにくい日本の隅に幽閉してしまうという戦略を用いたのである。

日露戦争後、東京に凱旋した「三好後備第二師団長が、先般北韓より凱旋の砌、東京迄持還られたる朝鮮土産に、一基の苔蒸たる石碑あり、(中略)豊太閤征韓の際、(中略)韓人挙て(中略)加藤清正を襲撃し、(中略)撃退の紀念の為、一の大なる石碑を建設(中略)今回日露の戦ひ(中略)池田旅団長が出征の際、不図該石碑を発見し、(中略)今後益日韓両国の間柄親密和熟を期せざるべからず、然るに彼の加藤清正撃退の紀念碑を永存するが如きは、唯両国間の感情を害すべき素因たるに過ぎず、(中略)遂に之を撤去して、池田少将に譲与せしより、(中略)三好師団長凱旋の節同師団長に託して、東京まで持還られたるものゝ由なるが、右は征韓の歴史上にも参考に供すべき好紀念物なればとて、同將軍より帝室に献上し奉られたる」(匿名 1906: 31)。「陸軍省より靖国神社境内遊就館に<sup>1)</sup>出品したる北韓大捷碑は、(中略)同館裏手の築山に建設中なり(中略)此の碑は韓国駐屯軍の池田少将が威鏡北道なる監溟駅に於て発見したるものにして、碑面に有明朝鮮国威鏡道壬辰義兵大捷碑の額字及び中訓大平守掌楽院正知製の文字あり」(画報生 1906: 44)。

これは日本国内で喧伝された根強い征韓論に歴史的な正当性を保証する資料として利用する意図があった。つまり、その内容が日本軍敗戦の記録であるがゆえに、この歴史的事実によって朝鮮人の感情が高ぶることを憂慮して、歴史を捏造し隠蔽するために、この碑を東京の靖国神社境内に幽閉したと理解できる。植民地支配と侵略の過程で引き起こされた歴史的事実の隠蔽と捏造の代表的な事例といえる。典型的な文化の脱脈絡化の姿である。

文禄・慶長の役や、そのときの英雄であった朝鮮側の李舜臣將軍に関する遺物が、別の経路で幽閉されたこともある。1946年5月14日付の記事は、総督府博物館がどのような意図で朝鮮半島各地の遺物を収集したのかを提示してくれる興味深いものであ

る。「麗水李舜臣碑 勤政殿から搬出、原地に返送」(館報 1:3-4)。この事実は、総督府による収集の意図を明らかにするだけでなく、博物館が行うことのできる重要な業務を例示している。勤政殿(朝鮮王朝時代の王の国政執務室)に収集するという名目で強制移送され保管されていたもののなかに、李舜臣碑があったのである。李舜臣碑は、文禄・慶長の役と関連して日本人に特別な意味をもっているため、本籍地から引き離される運命にあったようである。勤政殿は植民地時代にはまったく使われることがなかった建物である。隠蔽と捏造は、博物館の内部と外部を選ぶことなく進められたと指摘できる。

1938年10月、日本博物館協会(文部省内)が発行した『博物館研究』11巻10号6ページには、当時の博物館協会によって開催された「第六回全日本博物館週間」(同年11月1-7日)のポスターが掲載されている。このポスターに表示された「全日本」の領土は、日本列島だけでなく、サハリン南部と台湾、そして朝鮮半島を含んでいる。帝国主義の実現が博物館を介していかに可能であり、それがどのような教育的効果をもっていたかを考えるうえで、格好の事例である。それは博物館を通じた支配の表象であり、当時の朝鮮に対しては「内鮮一体」という思想の実践を示しているからである。

植民地時代に行われた脱脈絡化の進行過程を示す次のような報告もある。1947年の記事によれば、「慶尚南道山清郡山清面乏鶴里廢寺で自然倒壊した三層石塔は、日本植民地時代に総督府博物館があった時期に大邱で某日、人手に渡っていたものを本館から搬移させたが、戦争中だったため、復建できず事務室正面の広場で徒然に雨風にさらされて放置されていた。本館ではこの再建計画を立てて実行し、基壇をつくったところ、おりよく米国人教化局長クネズビッチ大尉の斡旋で米軍工兵隊の援助を受けて完了した。この石塔は新羅統一時代の秀作で、博物館石塔建立広場に一層偉容を加えた」(館報 1:8)。脱脈絡化された文化は典型的なヘテロトピア(Kahn 1995: 325)を構成する要因となり、まがいものの文化として残っている。いまなおそれらは、あたかも本物のように整頓された、まがいものの姿のままである。

博物館の石塔建立広場とは、朝鮮総督府博物館が全国から仏塔を集めて一ヶ所に陳列した広場であり、それが典型的なヘテロトピアなのである。『博物館報』をひもとけば、「全国から館内に移送された塔碑が主に高麗時代のものに集中していることがわかる」(博物館報 1:15)というが、その点についても緻密な解釈が必要と思われる。高麗時代の塔碑が集中的に本籍地から引き離されたことは、何を意味しているのだろうか。本籍地での意味を剥奪されて強制移住された塔身が一ヶ所に幽閉されてい

るのである。この現場は、一面では朝鮮総督府の支配権力を示している。植民地権力の核心である総督府の裏庭という配置は、植民地時代の博物館に付えられた意味を示すに余りある。独立以後の民族主義的な博物館でも、この配置はそのまま維持されており、幽閉された塔の脱脈絡化がはらむ問題については、何らの反省もない状況がいまなお続いているのである。

慶州では、現在の国立慶州博物館の沿革を見ると、「1913年、慶州に古跡保存会が創立され、遺跡保存を図ると同時に旧客舎を利用して遺物を収集した」（館報 1:9）とある。1915年に総督府博物館が設置される以前に、すでに慶州では古跡保存会という団体が結成されていた。慶州ではすでに植民地時代初期に個人による文化財掠奪がかなり進んでいたことを暗示する一節である。行政組織はその後の収集の役割を担当したようである。新羅千年の古都慶州という歴史の厚みに比べれば、古跡保存会の客舎は「猫の額」ほどに過ぎなかったものであろう。名目上だけで活動した古跡保存会の存在は、むしろ文化財の毀損（mutilation）の進行過程を覆い隠すのに役立っていた可能性が高い。

1938年、「総督府博物館が時局柄内鮮一体の関係を強調する意味から古代内鮮関係資料特別展を行ひ、古代内鮮文化を物語る貴重な資料百余点を一室に展列して、内地朝鮮の各出土地を明かにする説明を付し、又遺物及写真で兩類似の点を明かにし、更に期間中“本年の博物館週間に内鮮一体の往時を語る”と題して同館長佐瀬直衛氏が講演をラヂオ放送。期間中は観覧料5銭を2銭にして博物館週間の意義を徹底した。なほ期間中の観覧人員は4,190人で内朝鮮人3,185人、内地人1,005人であった」（博物館研究 11(11):5）。博物館は、内鮮一体の虚構的なイデオロギーを植民地の被支配住民に植えつけるという目的を行動として実践する、もっとも重要な役割を担っていたことがわかる。

「工学博士関野貞氏は、去年（1909年）9月16日韓国政府の囑託を受け汎く韓国の古建築物及び三韓時代前後の遺物を調査せむ為め文学士谷井経一、工学士栗山俊一の両氏と相携へて、約百日間（中略）韓国古美術の淵源を究め（中略）韓国は僅かに三百年前の物が12,3件残留し居るのみ、（中略）千年以上の遺物が日本の如くに保存され居るは珍しきことにて、一つは萬世一系の皇室を戴きて革命動乱が無かりしと、一には宗教の変化が無く且つ旧貴族が襲世して克く古物を愛玩保存したるに因れり」（風俗画報 406:20）。戦禍による古建築の消失や、植民地化の前哨ですでに日本人によって掠奪されたことには言及しない。過ちを反対に被害者になすりつけるようなものである。日本と比較して朝鮮民族が文化財をきちんと保存しなかったと述べることに

よって、日本の学者が朝鮮の古建築の面倒をみなければならぬという名分を間接的に提示している。同時に、文化の蓄積が弱いことを指摘して、朝鮮文化の停滞性論を展開しようとした。植民地になった朝鮮王朝の歴史的正当性と、その基盤を抹殺しようとする意図が明らかではないか。

「チェコスロバキアのような東欧では、民族的過去の称賛と（外部の侵略に対する）抵抗を高揚するための手段として考古学が盛んであった。西欧では、1880年代以来、階級間の葛藤が深刻になり、考古学と歴史学は、産業化された国内で一体性と協同の精神を高揚するための努力の一環として民族的過去を称賛するのに利用された。（このような関連で）欧州に限定していえば、先史考古学は歴史科学の一つとみなされてきたのである」（Trigger 1984: 358）。西欧の学問体系をほとんどそのまま翻訳して受け入れてきた日本では、西欧に対しては東欧の地位に類似した、すなわち西欧に対して相対的に劣勢な立場から、考古資料や歴史を見る目が養われた。そして、日本の植民地（台湾と朝鮮）に対しては、西欧式勝利者の立場で考古資料や歴史を見る目が養われたと理解できる。世界史レベルでは、民族的過去の称賛と外来勢力に対する抵抗の手段として考古学や歴史学が受け入れられたのであり、植民地を経営する立場では一体性と協同精神の高揚を目指す考古学や歴史学が強く要求されたのである。そして、日本の植民地政策は内鮮一体を強調し、その政策を総督府博物館が植民地住民の思想教育を目的に積極的に実践していった。

「植民地統治者は彼ら自身の過去を称賛する緻密な理由を持っている反面、彼らは自身が占領し統治している民族の過去に対しては、激賞する何の理由も持っていなかった。実際、彼らは被支配民族の未開性と歴史的成功の欠如とを強調することによって、彼ら自身の過ちを相対的に正当化する努力をした」（Trigger 1984: 360）。ここでまさに停滞性論が強調されるのである。朝鮮総督府は未開性という概念の代わりに停滞性という概念を見出した。当時、内鮮一体を強調した総督府と日本帝国主義は究極的に矛盾する二つの概念を同時に適用した。内鮮一体論と停滞性論である。内鮮一体であれば、日本にも停滞性論が適用されるべきではないのか。支配のための文化掠奪と思想教育は結局は矛盾に陥らざるをえない。

日鮮同祖論へと再脈絡化を試みたのが朝鮮史研究と総督府博物館の建設および運営である。そこに「もの」中心の好事家的で骨董的な意図が加味された。いずれも文化の脱脈絡化を前提とする帝国主義的な文化政策の政治的实践として進められたのである。したがって、脱脈絡化された「もの」は、本来の脈絡において持っていた意味を失い、沈黙せざるをえないことになる。支配の手段として利用される「沈黙するもの」

(reticent objects) は、ガラスケースに納められ、植民地主義を称賛するために立ち並ぶほかはないのである。

### 3. 開拓と植民の支配哲学——文化の再脈絡化（I）——

日本の歴史において開拓と植民は比較的近来のできごとである。北海道で屯田兵制を設置して始まった開拓と植民のやり方は、以後琉球と台湾で積んだ経験をもって朝鮮半島に進出した。もちろん、日本帝国主義による拓殖主義は朝鮮半島の次には満州に延長された。大日本帝国が設立した博物館は拓殖主義と不可分の関係にあることを指摘し、それが朝鮮半島で成し遂げられたプロセスを明らかにする必要がある。

朝鮮で行われた博物館と拓殖主義は大きく二つの根幹に整理することができる。朝鮮総督府博物館の植民地主義的な専有とそれ以後の文化政治学という枠組み、そして近代化を名分とした脈絡破壊と支配的再構成のプロセスである。いったん、脱脈絡化されたものが博物館やそれと似た場所で展示されると、もともとの展示品は意味変質のプロセスを経験せざるをえない。展示品を収集、運搬、展示する人々は、植民地的支配の概念のもとに文化的専有を試みた。具体的には、内鮮一体論と停滞性論を支持する手段として展示品を用いようとする意図が核心にあるために、停滞社会の近代化と毀損された文化財の保存という名目で再脈絡化のプロセスを踏んだのが、朝鮮総督府博物館およびそれに類似の機関で生じた事態であった。

植民地統治期間中、朝鮮総督府は、総督府博物館以外にいくつかの重要な博物館をそれぞれ特定の目的を実現する手段として設立したが、究極的な目的はすべて開拓と植民のプロセスを通した効率的な支配にあった。いくつかの具体的事例を取りあげて考えてみたい。国際政治の緊迫した情勢、軍事的な要因、そして時間の切迫ゆえに実現はできなかったが、総督府を中心に立案した博物館計画の進行過程から拓殖主義の全容を十分に読みとることが出来る。開拓主義の意図が博物館という施設と機構を通していかに実践されるのかを示す事例である。

「(総督府)博物館は朝鮮文化の研究所であり、工芸美術の調査所であると同時に、半島の古代芸術を世界に紹介する目的を持っている」(博物館報 1(1):16)。半島の文化と歴史を工芸レベルに縮約させようとする博物館経営の支配哲学が濃厚に表明されている。当時の総督府では、新羅の古都慶州に朝鮮人学生のために工芸学校を設立する一方で、対照的に日本人支配層の子弟の高等教育のためには、考古学と美術史を講ずる京城帝国大学を設立した。1930年10月の記録をみると、「朝鮮総督府博物館で

は現在古美術を中心とする多数の貴重な発掘物その他歴史的芸術品を収集し、(中略) (しかし) 陳列するにはあまりに狭隘で、博物館倉庫には(中略) 歴史参考品が埋れてゐる」(博物館研究 3(10):7)。総督府博物館の中心的な関心が古美術と歴史的芸術品にあることがわかる。この方針は継続的に進められ、後日、韓国の解放後に設立された国立博物館でも、この路線をほとんどそのまま受け継いでいるという解釈が可能である。

「(1934年) 異常の躍進を遂げつゝある産業朝鮮にふさはしい三大特殊博物館建設の計画が、現今着々進められてゐる。すなはち農林、鉱業、警察の三博物館で、農林博物館は多木氏の寄付35萬圓で、鉱業博も15,6萬圓、警察博も8萬圓の予算で完成を目指し、各方面に寄与することが期待されてゐる」(博物館報 7(6):13)。「明年(1935年) 総督政治25周年を迎へ、総督府が記念事業として農業、鉱業、警察の三大博物館を建設する計画があるのは既報の通りであるが、農業鉱業は寧ろ一つにしてこれに水産を加へ、産業博物館を50萬圓程度で建設することになるらしい」(博物館研究 7(7))。博物館の建設計画を通して知ることのできる、もっとも成功した植民地化の部門がまさに農林と鉱業、警察である。農林鉱業の原資材の搾取に成功した植民地産業には、民の搾取による警察の「民業」も含まれることが指摘できる。植民地でもっとも成功した部門を讃美し宣伝するために、該当分野の専門的博物館を建設することは、植民地政策の一環なのである。

博物館の機能を思想的支配の手段として検討した記録も存在する。「思想犯罪の特殊道咸南は民風の作興、地方の振興に関する諸施設に努める一面、警察力による徹底的弾圧を図つてゐるが、更に道民の自覚に基づく精神作興案としてオープン・エヤ・ミウヂアム設立の計画が具体化せんとしてゐる。即ち咸南殊に咸興府近郊は李朝発祥の地として本宮、定和陵、帰州寺、純陵、義陵、馳馬台等の名勝旧跡に富んでゐる事実を利用し、これ等を総合した野外博物館を設け、報本反始、すたれ行く道義観念の復活に資せんとする案で、過般行はれた稲葉君山氏の視察も、この計画に対する内調査の意味らしい」(博物館研究 5(8):7)。この1932年の記録は博物館を植民地統治の手段として利用しようとする意図を赤裸に表明した事例である。満鮮史を研究する稲葉君山は<sup>2)</sup>、警察と博物館の合作である野外博物館の建設計画のため、現地を視察した。植民地支配に動員された学者の実態を表す一例である。

1935年1月に発行された『博物館研究』の「博物館ニュース」によると、「施政廿五周年記念事業として、明年度から三ヶ年計画で総合博物館建設のことは既報したが、その後財務局で査定の結果ママ百萬圓に決定。内容は、整地費五千圓、建築費八十七

萬圓、(建坪二千七百七十五坪) 施設費四萬七千圓、初年度調整費四萬圓、事務費四萬五千圓、その建築様式は鉄筋コンクリート三階建て、建設地は大体倭城台の総督官邸付近の予定である」(博物館研究 8(1):14)。その年9月には本来の計画に若干修正を加えた。「総督府施政廿五周年記念事業に綜合博物館建設は当初の百萬圓計画をさらに増額し、国費百萬圓寄付金百萬圓、総額二百萬圓として予定の考古美術館科学博物館のほかに現在の総督府博物館を改築し朝鮮資源館と命名、鉱産物、水産農林産物などを陳列することになった」(博物館研究 8(9):6)。綜合博物館と産業博物館の建設に計画が変更されたことがわかる。博物館の方向は、文化と産業の二つに整理されたのである。植民地統治の二つの支柱は人民と土地であり、開拓植民地化は、植民地生産の基礎になる産業政策と民衆を治める文化政策の二本の線に沿って進められた。植民地の博物館は産業政策と文化政策を表象するという役割が与えられていたと理解できる。

「朝鮮施政記念博物館 既報建設計画はその後着々進捗し一般からの寄付申込みも続々殺到する好況で9月11日現在で早くも累計74萬圓に達し、三井三菱の15萬圓を筆頭に相当大口の寄付があった、なほ設計は一般から懸賞募集することになった」(博物館研究 8(10):6)。1936年には博物館建設のための設計公募があった。「総督府施政二十五周年記念博物館設計図を懸賞募集中であったが旧蠟その発表があった。一等当選者は同総督府会計課技手の天野要氏でその設計図は環境に最も適合した朝鮮趣味を表現し、簡便莊重な威厳も備へたものである。なほ来る5月から着工される筈で、それと同時に官制を設け職員を任命するが館長は勅任<sup>3)</sup>でその下に奉任<sup>4)</sup>の部長3名を置き、総員百名を超ゆる見込みであると」(博物館研究 9(2):6) いう。また、その年の秋に地鎮祭を挙行了した会場の全景写真と当選作の写真も当時の博物館研究誌に掲載された。

1937年4月の記録では次のように進展を見せる。「総督府に博物館建設委員会を設置し大野政務総監を委員長に顧問として今井田清徳、山田三良、速見晃、伊東忠太、武田五一、内田詳三、佐野利器、加藤敬三郎、有賀光豊の九氏をあげ委員に大竹十郎、林繁蔵、富永文一、山村鋭吉、上野直昭、小田省吾、重村義一、崔南善の八氏その他幹事囑託をそれぞれ任命した。なほ懸賞募集した設計案にも幾多の変更を行ひその変更設計も十二年度中には完成することになってゐる」(博物館研究 10(4):8)。

このような進行過程を経て、最終的に決定された綜合博物館の位置と構成は次の通りである。「朝鮮総督府博物館の新築進む、施政25周年記念事業の一つたる綜合博物館は経費二百萬圓で総督府後庭に建設されることは既報の通りであるが、美術館は15



萬圓で六角塔香遠亭がある池の北正面に684坪、既に工事にかゝり本年9月まで落成の予定。本館即ち現在の総督府博物館（美術・歴史・考古）は115萬圓で池の東に南面2,300坪、科学館は70萬圓で本館の東南に西面684坪、いずれも秋までには着工、1940年に竣成のことゝなっている。科学館は現在の倭城台より充実を図り600名収容の講堂や図書室研究室を付設する。また美術館は鮮展会場その他とする他に各種の展覧会その他東洋趣味を普及させる催しにも貸すことになってゐる」（博物館研究 11(6):6）。しかし、この博物館の建設と実践は途中で中断された。閔妃〔朝鮮王朝 26代高宗の妃、1851-1895年〕殺害事件によって汚点がついた場所を壊して、優先的に美術館の建物だけを完成させ、残りの大部分は政治的な理由で中断された。大東亜共栄圏政策による帝国領土の拡大で新しく編入された地域と軍事目的に資金が優先して使用されたのである。たとえば満州の博物館建設は1940年代初期も継続されていた。

支配者の被支配者に対する恩恵を誇示する方法として博物館が利用されたことも少なくない。「朝鮮恩賜記念科学館は、大正天皇の成婚25周年記念に際し、朝鮮の社会教育事業のために17万円の恩賜金を受けてできたものである。当時の総督は教育機関の従事者と協議した結果、博物館をつくることにし、以前の歴史博物館や美術博物館とは異なった科学博物館を建設することにした。恩賜記念の文字は、そこから頭につけられた」（岩佐 1931:4）のである。植民地統治のための文化事業という名目が明白である。

1938年の記録によると、「恩賜記念科学館の重村館長は、海軍少将として日露戦争で青島攻囲軍に参加し、輝かしい勲功を立てている。そして彼は科学博物館の建設が決定されると、総督齋藤海軍大将の推薦で創設事務囑託となり、総合博物館の建設が決定されると建設委員会委員となり、その基礎を計画するうえで功績を立てた」（博物館研究 11(6):7）ということである。博物館やそれに関連ある学問分野の研究者ではなく、戦争の英雄に博物館経営の責任を預けたという点に、文化政策に隠された支配の一面が顕われている。植民地統治の円滑な運営のための軍-学複合（military-academic complex）の一例といえることができる。

「北鮮科学博物館の新設、財団法人威鏡北道科学教育財団で予て建設計画中であった同博物館は昨夏起工以来工事順調に進捗し此の程第一期工事竣功の通びに至ったので、（1942年）10月3日落成式（開館式を兼ね）が（開館式を兼ねて）举行せられた」（博物館研究 15(10):7）。これは1942年の記録である。「北鮮科学博物館は、威鏡北道の地理的・産業的な重要性が勘案され、清津府に建設された。これは鉱業家岩村長市と水産家宮本照雄の出資によって設立された財団が基盤となっている。第1本館に

は、物象部、生物部、水産科学部、地質・鉱物部、鉄鋼部、化学工業部、防空科学部、付設として栄養科学部、鉱山科学部、工作部、教弁物貸与部で構成されていた」（博物館研究 16(2):4-6）。この博物館の設立目的は、地理的・産業的という言葉でうまく表現されている。

以下の第11回全国博物館協議会議事録（第1日）に録載せられている北鮮科学博物館に関連する記録が、この博物館の中心的な機能を浮き彫りにしている。たとえば、当時議長を務める棚橋は、1943年10月30日に東京帝室博物館講堂において、「本会提案の第一協議題，“時局下戦力増強に資するため博物館に於いて実施すべき事業如何”についての説明」（博物館研究 17(1):2）をした。また、北鮮科学博物館の岡崎正は、「最近開設された専門講座での）教材は文部省の要目に基づき、戦力増強のため、航空機、自動車、その他科学兵器等の一般について講義を実施し、（中略）付属工場で工員を養成して戦力増強に努めている。その他栄養研究所では、戦時下栄養補給を主眼とし、栄養に関する図書、図表、統計等を展示し、（中略）将来鉱山科学に関した施設を強化し、第一線の鉱業戦士養成に努めることが目下計画中である」（博物館研究 17(1):3）と発言している。これは1944年1月の記録である。

朝鮮において大日本帝国の博物館は、住民を思想統制するための道具としても利用されていた。博物館は戦争のための動員体制に万端の準備をする姿も見せている。博物館は美術と工芸の名の下で歴史の歪曲を具象化し、科学の名の下で資源と産業の掌握を实践した。そして、博物館による文化表象を通して植民地統治のための思想統制をねらった。これが、朝鮮半島で実践された大日本帝国の植民地主義的な博物館の姿だといえる。そのプロセスでは、文化の脱脈絡化と再脈絡化を組織的に行った。収集品や資料をいったん脱脈絡化し、さらに別の目的へと再脈絡化するための材料として活用した。

総督府の支配哲学と植民地経営の方針は個人資源にも展開された。植民地でたやすく金をもうけた日本人の巨万の富は、帝国主義に足並みをそろえ、資金と財産を喜捨するという方法を博物館という制度を通して試みた。「大東亜共栄圏内の古美術品を一堂に収集し、考古学及美術研究に資せんとする半島の水産王香椎源太郎氏（福岡県出身）が建設計画中の考古博物館は、予定どおり山下前府尹の肝入りで建設地所を物色中であったが、（中略）翁頭彰銅像緑の地である釜山府本町の高台香椎公園内に敷地を決定し、翁の私財百萬圓を投じ敷地4000坪、地上、地階各一階の堅牢な総コンクリート建の予定で、（中略）翁が過去35年間に収集した我国歴代の古美術品を初め、（中略）価格に見積もって約一千萬圓を凌ぐ貴重な資料が公開される」（博物館研究

15(12):7)。植民地に進出した日本人事業家の骨董品収集と取引、そして文化財保存という名目でそれらの功績をほめたたえ、その過程に博物館が直接・間接的に介入した。それは、植民地において文化の脱脈絡化の作業が個人レベルでも広範囲に展開されていたことを証している。

「朝鮮実業界の元老、釜山市の香椎源太郎のかねてからの念願として、太古からの内鮮関係を物語る文献、古美術工芸品等を展覧すべき博物館の建設計画は、その一端として既に旧英国領事館跡四千坪を敷地に買収してをり、最近建築費その他の資金に充てるため、芝美術倶楽部でその収集品たる朝鮮出土の骨董名器の売立を行った」(博物館研究 7(11):12)。これは1934年の記録である。香椎源太郎は大規模な骨董品収集家の一人であり、彼は内鮮一体を具象化する博物館の建設に必要な出発基金(seed-money)を寄付した。一度収集された骨董品が売却を繰り返して顧客に取引されたことがわかる。内鮮一体のイデオロギーを具象化する博物館建設資金のために、朝鮮の美術品が売却されなければならないという状況は皮肉としかいいようがない。掠奪を受けた文化の一部分が、その文化全体の歪曲宣伝のために売却されていく。植民地統治の手段として利用される文化政策自体が、拡大再生産して推進されていることが読みとれる。いったん、それがサイクルとなって動き始め、それ自体の動力に慣性がつくと、植民地支配の文化政策は終わることなく搾取と掠奪の構造を再生産していく。

博物館における文化の再脈絡化は総督府の支配権力を象徴すると同時に、植民地の人民を支配に慣れさせる機能をも果たした。植民地の支配層を形成した日本人は、自身の名誉を美しく飾るために、文化財の収集と収集骨董品の喜捨および寄贈を試みた。この骨董文化を形成しえた背景には、独占的な企業の経営があり、その下で朝鮮人が彼らの手足となって活動していたことは疑いない。このようにして支配層における個人レベルの骨董文化は日本から輸入され、また新しく創出されていった。そして、そのプロセスが文化の再脈絡化を飾った。骨董品収集という個人的な文化の脱脈絡化が、官主導の脱脈絡化に劣らず、韓国の伝統文化を破壊したことはないまでもない。官権と個人の金権は、文化支配の原因から結果に至るまで、文化の脱脈絡化と再脈絡化の同一のプロセスを歩んだ。博物館と骨董文化の出現こそが、支配哲学による文化の再脈絡化のプロセスであり、同時にその結果なのである。

文化の「再脈絡化は、一種の一般的な社会的プロセス」(Thomas 1989: 41)であり、それゆえそのプロセス自体が新しい文化の形成に寄与する。総督府の博物館文化と個人中心の骨董文化の出現は、このような再脈絡化の結果である。問題は、そのよ

うな再脈絡化の目的がどこにあり、どのような経路を経由したのかということにある。そこに支配者の論理が介入したり、文化財収集の野心が関与する場合と、そのプロセスが文化の担い手自身の文化の再創出 (reinvention) の努力によって引き継がれる場合との間には、文化変動のプロセスに大きな差が生ずる。そして、植民地時代の文化変動のプロセスは、前者の場合に該当するものがほとんどであった。

1933年「朝鮮宝物古蹟名勝天然紀念物保存令の制定により、その最初の指定を受けるものは宝物10件、古蹟200件、名勝2件、天然紀念物50件内外と見られてゐる」(博物館研究 7(5): 13)。しかし保存令は、植民地からの文化財掠奪がすでに大規模に行われた後で現れたのである。もちろん、このような法的な処置がそれまでの掠奪を合法化する役割を果たし、同時に掠奪された遺物の骨董的金融価値を高める効果があったことを忘れてはならない。意図的な再脈絡化のための政治的暴力である。

すでに、脱脈絡化の大部分を政治的中心部が推進した裏で、そのプロセスを正当化し、被支配層がまったく動きを取れないようにするための法的規制装置が準備されていた。「明治4年5月23日、(中略)古器旧物の保存方を布告」(椎名 1989: 51)した日本の場合(1871年)と、植民地朝鮮での場合(1933年)を比べてみる必要がある。日本では博物館設立の直前である1871年に保存令が布告された。つまり、一般の日本人の古器物に対する関心がそれほど早くから強かったのである。日本人が韓国に入ってきて早くから骨董品の収集に目を向けていたのも、このような歴史的な基礎があったと考えられる。

植民地支配層の個人富豪たちが試みた骨董文化というものは、一種の好奇心に依存することもあった。その文化が気に入ったために、またはその好奇心を満足させようと、金権を行使して文化財を収集するというプロセスは、究極的に盗掘という現象を発生させるほかなかった。「好奇心は中心となる歴史的転換、すなわち非自意識的 (unselfconscious) 経験としての文化から創り上げられた実体としての文化への転換を、表現することができる」(Thomas 1989: 43)。収集と展示という行為は、それを骨董品収集家と総督府博物館が同じように行うことによって、究極的には(収集対象とされた)文化の担い手である現地人の意識を変えろという役割をも果たす。最悪の場合には、自身の文化を自ら破壊することも生じた。

骨董的好奇心すなわち好奇心教育 (curiosity lesson) が現地人にも伝播し、後には現地人が自らの文化破壊の段階に入っていく歴史的経験を迎えるのである。

鮎貝コレクションのほか、大邱の市田次郎や小倉武之助、釜山の香椎源太郎のコレクション、ソウル社稷洞の骨董店で発見された森啓助の骨董品、黒田幹一コレクション

ソの古銭などが国立博物館に移された経緯については有光(1997: 216-217)に詳しいが、彼らの収集した骨董品はまさにそうした骨董文化の極致を見せている。植民地権力から個人が手口を習い、それはさらに被支配者の間にも伝えられることによって、植民地の被支配者をして骨董品収集に血眼にさせ、自らの文化破壊と自己破滅に走らせた。収集癖と資本力を基盤にした「骨董文化」はこのような経路で定着していった。典型的な植民地根性 (colonial mentality) の一つである。

山田針次郎の収集品は、総督府博物館が1922年と1923年の二回にわたり購入した。その他にも山田は、1913年頃から大同江面の遺跡を探索して数千余点の遺物を収集し、数百枚の楽浪および高句麗の瓦を総督府博物館に寄贈している(藤田 1932: 1)。平壤高等法院検事長だった関口半は、1921年頃から楽浪遺物を収集し始め、山田に遺物を博物館に寄贈するよう説得した。また、自らも二千圓を平壤府に提供して楽浪古墳調査を総督府古蹟調査課に行わせ、年号銘が書かれた漆器を初めて発見するという成果をあげるなど、後援者の役割を果たした人物である(藤田 1933a: 7)。また、同じく藤田によれば、朝鮮古語研究者であるばかりでなく、朝鮮古美術の研究でも創始者として認められている鮎貝が、日清戦争のときから朝鮮で収集研究した美術工芸品は、一つの博物館をつくることのできるほど大量に残っているという。彼の収集品は、1926年に三井物産株式会社に移され、1930年に同社社長から総督府博物館に寄贈された。しかし、鮎貝の収集品の中でも、朝鮮の歴史的参考品として最も貴重な慶州出土の金銅舍利盒と伝慶尚北道出土の銅鈴の一類が、東京の三井家に残されており、それは遺憾なことだと述べる(藤田 1933b: 18)。

1935年の記録によると、開城府立博物館の陳列品は「主として朝鮮総督府博物館所蔵品と鮎貝房之進氏の収集品にて、三井物産の手に帰し同社より改めて総督府博物館に寄贈されたるものゝ大部分を出品し、更に中田市五郎氏の収集品に係る高麗陶磁器を開城府に於て数万圓で購入せしものと、一方民間有志の寄託品、開城付近より出土せる遺物等」(博物館研究 8(4): 9)である。ここでは、開城で活躍した骨董品収集家の中田市五郎の名がでてくる。

小倉武之助の朝鮮出土考古品のコレクションについては、次のような話が残っている。「小倉氏は、朝鮮慶尚北道大邱に本社をおいた南朝鮮電気会社社長であったがかつて朝鮮出土の考古品が、内地及び外国に流出するのを慨嘆されて、自己の及ぶ限りは、之等の朝鮮出土品を購はれて、朝鮮本土より流出を阻止されることに努力されたのであった。(中略)民間に於ては小倉氏コレクションを以て第一等のものとなったのである。而してそれが単なる収集に非ずして、学問的資料として利用されるために

は（中略）全く朝鮮関係の考古学の進歩に寄与するところが多い」（博物館研究 14(7): 1）。

「日本人の美術品を接収するために、日本人会の小谷益次郎と会って正式に交渉もし、日本人富豪の加藤などを個別訪問して収集もした。（中略）芍薬島を所有し、そこで生きている鈴木某という人物が高麗磁器をたくさん持っているという情報を聞き、軍政庁文化担当官とともに警察船に乗って芍薬島に行くと、鈴木婦人ママだけが残っており、収集品は永宗島にあるある韓国人の家に移されたという話を聞いて行ってみると（中略）90%以上が新品であった。（中略）加藤という日本人富豪が値打ちのある辰砂〔顔料・漢方薬の材料にもなる鉱物〕を持っているという情報をソウルの骨董商から聞き、訪問して交渉したところ、ソウルの某氏に莫大な金額になる一切の美術品を売ったというのである。（中略）李錫九という人物であることを調べだした。

（中略）楼下洞の自宅で寝ている彼と会った。加藤から持ってきた美術品を返してくれるように言ったが、すでに売却したり、隠してしまったため、仕方なく、新たな条件を出し、高麗・李朝の陶磁器19点と現金20萬ウォンを寄贈させることにした。そして、その寄付金で博物館後援会をつくり、その所有とする19点の美術品は所藏品として登録した」（李慶成 1971: 4）。

「解放後、軍政庁を通じて日本人が所持する図書絵画、陶磁器などの美術品を受けつけたのは、（中略）その数量が莫大で参考品として大きな収穫となったが、数量に比べて逸品が少ないのが残念である。〔それらのなかには〕①1945年12月27日、鮎貝房之進が所持した古書籍雑誌類1068点、②1946年3月21日、富平旧造兵廠の大型青銅火鉢4個、③1946年4月1日、黒田幹一らの所持品である青銅器、貨泉〔中国の古銭〕など数点、④1946年4月19日、高木貞一の陶磁器など12点、⑤1946年5月28日、大田道庁敵産管理課の陶磁器（高麗、李朝、中国）990点、⑥1946年7月25日、群山にいた嶋谷八十吉の収集品である日本書画195点、陶磁器および鉄器133点、⑦1946年11月14日、全州重要物資営団の陶磁器107点、⑧浅川伯教の収集品2011点〔が含まれる〕」

（館報 1: 7）。総督府の植民地統治の期間中に、日本人が収集という名目で個人的に掠奪した美術品の数字は量において膨大であるばかりでなく、その内容面でも国立博物館の陳列室を満たすことができるほど立派なものであった。

百済の古都である公州では、また別の日本人「軽部慈恩が大規模な美術品収集をしていた。軽部の最終在職所である江景女子中学を訪問したが、その収集品はすでに文化教育部に移送されていた」（館報 1: 11）。中学校教師であった軽部慈恩も植民地での文化掠奪者の役割を担った。金権によって骨董品を買収した商人と同様、教職にい

た者も同じ行為をしたという事実は、植民地で総体的に行われた文化の毀損の様相を見せてくれる。そして、そのような行為をする日本人が、旧王都を中心に全国的な拠点を確保していたのである。

個人的に遺物を遺跡から引き離す役割をした者は、大部分が日本人であった。もっとも多く、遺物を収集した人物の名前が残っている。香椎源太郎、山田針次郎、関口半、鮎貝房之進、小倉武之助、森啓助、黒田幹一、中田市五郎、市田次郎、高木貞一、嶋谷八十吉、浅川伯教、軽部慈恩、加藤（仁川居住）、鈴木（仁川居住）などが主要な骨董品収集家であり、彼らが収集したものの一部は、三井物産株式会社が買い取ったが、最終的には多くの収集品が博物館に寄贈された。そのような過程で収集品は本籍地から切り離され、「伝」が名称につけられる運命、すなわち本籍地が曖昧になったり、不明になる運命にあった。多くの遺物と遺跡に「伝」がついているのは、収集過程の複雑さを教えている。それは、盗掘という行為の擬装であったり、価値を上げるための商売人の作為でもあったのである。

収集家が収集品の大部分を何度も売却することで金銭的な利益を得たことは明らかである。もちろん、関口のように熱心な研究者もいたが、そうでない場合の方がはるかに多かった。このようにして掠奪と毀損のプロセスが進行していった。そして、このプロセスは現在に至るもなお、骨董品収集という名目で進行中である。人々が故郷を探索し、さらに故郷に帰ることを希求するように、本籍地を失った収集品は、故郷に帰れる日を待っている。それは研究者のための要請ではなく、文化自体にとっての根本的な問題である。

このような事実に対して、検討しなければならない問題が少なくとも二つある。一つは収集の過程で発生する脱脈絡化の問題であり、もう一つは本籍地に還元することにもなり再脈絡化の問題である。脱脈絡化とは支配権力が動員した行政力により、調査および研究の名目で組織的に掠奪することである。多くの文化財が「保存令」による合法を装って本籍地から強制移住された。さらに、植民地支配層を構成した日本人が、個人的にその手法を習って、研究や調査という合法的な手段ではなく、売買という非合法的な手段を使って、植民地の文化財の毀損に加担した。その過程で、もちろん、被支配者を金銭などで買収したことは火を見るより明らかである。

植民地の支配勢力による官民合同の文化破壊に対し、文化的抵抗を朝鮮人が試みた。つまり、日本人中心の収集行為に対する競争者として朝鮮人が現れた。彼らの行為は民族主義を名分としていた。たとえば、後日、澗松美術館（ソウルの城北洞に所在）に職を得た全瑩弼がよい例である。しかし問題は、支配勢力と抵抗勢力との間の競争

的な文化財収集の努力が、結局は本籍地の文化財を大量に脱脈絡化させ、再脈絡化させるプロセスを創り出してしまうことにあった。一方は意図的な脱脈絡化と再脈絡化の行為であり、もう一方はそれに対する抵抗の行為であるが、結果は同じ文化的プロセスを生産するわけである。いずれにせよ、根底にある罪は文化破壊を意図した植民地支配者にあることは明らかである。

支配者が骨董収集家として職を見つける過程は、被支配者層である朝鮮人にもしっかりと教育され、被支配者層のエリートが自らの文化財を毀損する状況も生じた。被支配者が己の身体を八つ裂きにする行為が演出されるのが、植民地支配によるヘゲモニーの極致である。研究と調査の名目による文化財の本籍地からの移送は、後日国立博物館でも展開された。展示と陳列のために引き離された文化財の意味が、どのような再意味化のプロセスを経験するのかに関しては一切考慮しなかったのである。

骨董品収集という現象が一般へと拡散することによって、文化財の再脈絡化は新しい様相を迎えた。本籍地に返還することは第二段階の掠奪を助長する可能性があるという理由で、博物館が文化財保存の役割を担わなければならないという論理がだされた。一時的に総督府博物館に販売あるいは寄贈された収集品が、後日再び軍政庁によって接收された経緯を見れば、骨董品収集家が文化財を選別して取り扱ったことがわかる。一部に指摘されているように、きわめて貴重な収集品には原状復旧できないものがあるという事実である。その結果、売買、寄贈、押収、搬出などに現れる。日本に隠匿された文化財は、いまだ本籍地に返還されるのを待っているのである。

「私は、世界に関する整序された表象が、道徳的かつ政治的秩序をも提示すると考える。表象の諸実践を批判的に分析する目的は、『読者』のために『テキスト』を精巧化することだけにあるのではない。さらには、テキストの構成に関する条件と方法を示し、ひいてはテキストのイデオロギー的推進力を示すことにある。ケネス・バーク (Kenneth Burke) の表現を借りれば、表象には敬虔な (pious) ものと非敬虔な (impious) ものとがある。後者は自省的 (self-reflective) であるだけでなく、転覆的 (subversive) でもある」(Brown 1993: 658)。ひいては、「文化的表象は究極的に理念的伝統性に転換」(Brown 1993: 661) されるため、博物館を通して植民地支配をねらった文化的表象が、植民地支配者の理念的伝統性を肩代わりしようと要求してくる。したがって、植民地のような支配様式の中で文化的表象のテキストを緻密に分析すれば、相当な価値を備えることができる。支配をねらった歪曲された文化的表象は信頼性がなく、その表象の意図は被支配文化の転覆をねらったものであり、展示と研究を通じた表象に対する綿密な分析は、逆に文化的支配の意図を暴くだろう。



#### 4. 民族と国家の文化政治学——文化の再脈絡化（Ⅱ）——

文化の再脈絡化は植民地主義的状况にのみ特有の現象ではない。それに対する反発を原動力にした民族主義と密接に関連した形でも現象する。「民族主義と博物館の関係には逆説がある。国民 (nation) は、自らを実在であると想像する (imagine)、事実は創造 (捏造 invent) されるものである。他方、歴史博物館や科学博物館は、表象の政治に内在する虚構にもかかわらず、自らを実在の称賛者と定義する。博物館は国民的アイデンティティの生成しつつあるモデルの副次的な構成要素であるかもしれない。しかし、国家の境界内に共存している諸文化について有形の証拠を提示することを前提としている点において、博物館の展示と [それを制作する] 職員は矛盾に巻き込まれることになる。[中略] 国家の文脈において政治的に有用な記憶を構成するために、植民地後 (post colonial) の国家の博物館は、選択的な記憶消去にも従事しなければならない」(Schildkrout 1995: 65)。

植民地支配の解消と同義語である「完全なる解放というもの、政治的だけでなく、文化的表象の新しい形態をも要求する」(Brown 1993: 658)。民族主義の実践と、それが生み出す新しい形態の文化的表象は、どの程度に、またいかにして、基礎となった植民地的テキストを受け継いでいるのか。両者の差異の分析は、大日本帝国の植民地から解放された後に推進されてきた文化民族主義の本質を理解するのに役に立つ。その作業は、博物館というテキストにおいて可能なものであり、これこそ本稿を作成する基本的立場の一つである。

文化を基礎とする民族主義的な運動は19世紀前半に北欧から波及した。西欧の政治的経済的支配権力に対する文化的抵抗が民俗学と考古学、およびこれらの学問分野を基盤とする博物館を発展させる原動力になったことは、すでに周知の事実である。「多くの歴史的遺物の収集は民族主義的な民俗主義 (nationalistic folklorism) の影響下に形成された」(Proslar 1996: 33)。この観点からいえば、植民地主義に対する対抗的存在として民族主義的な博物館が韓国で出現したプロセスは、世界政治の大きな流れの中から生まれた枠組みを、抜け出してはいない。そのような傾向は民族主義運動から一般化されていく傾向でもありうる。

「近代的な意味で最初の韓国の博物館は1908年、高宗 [朝鮮王朝26代の王、1852-1919年] によって建てられた皇室博物館 (Royal Yi Household Museum)」(Lee 1986: 30) であると主張されるのは、1915年の朝鮮総督府博物館よりもいち早く、そ

して1910年併合によって植民地になる前に建てられたことを強調したものと思われる。年次で見れば、この指摘は誤りではない。しかし、さらに遡って見れば、1905年には大日本帝国の韓国統監部が設置されており、朝鮮王朝の外交権と軍事権は事実上、日本の支配下に置かれていた状況にあり、すでに経済はほとんど全面的に日本の商人層に支配されてしまっていた。このことを考えれば、1908年に建てられた皇室博物館も日本帝国主義者の手の内で始められたとの推論も、不可能ではない。とくに、当時統監部はもっとも直接的に朝鮮皇室を監視する体制を整えており、大韓帝国の皇帝の一挙手一投足に干渉していたことも記憶しておかなければならない。したがって、近代的な意味において最初に韓国に建てられた博物館は、皇室博物館（1908年創立）であったのか、朝鮮総督府博物館（1915年創立）であったのかにかかわらず、植民地主義の支配の脈絡と密接に関連していたのである。

日本の敗戦によって朝鮮総督府博物館が閉鎖された後、米軍の K 大尉から博物館の研究員であった有光に、「(一) 朝鮮の政治に関与せず、興味も示さぬこと、(二) 朝鮮人研究者に考古学的発掘調査の方法を実施に臨んで指導すること、の二つの事項が特に要求される」(有光 1997: 206-207)。これによって有光には敗戦後も当分の間、不帰還命令が降りた。新しく赴任してきた韓国人館長（金載元）は、新しい博物館の開館準備のために有光の助けが必要であった。「解放日前、我々学者として発掘調査の機会を得た者はごくまれであった。我々は採掘方法の習得と研究資料の収集目的で日本人である有光教一を留任させ、慶州邑路西里にある一つの古墳を発掘する予定であった。金館長の責任の下で日本人である有光の指導を受けた館員の徐甲録は記録、林泉は製図、李建中は写真、現場監督は徐など、それぞれ分担した」(館報 1: 5)。「平壤博物館はその地方の有力者で、好古家である黄澳が館長に就任し、従来の日本人館長小泉顕夫と職員小野忠明の両人を約一年間留置し、博物館のすべての事務引き継ぎを無事完了し、開館した」(館報 2: 9)。ソ連軍が進駐した北と米軍が進駐した南で同じことが発生した。南側の国立博物館では平壤のそのような経過を全く知らなかったが、後日情報が入ってきたのである。

総督府博物館は30年もの長きにわたって機能しながら、その間に朝鮮人専門家をただの一人も育ててこなかった。単に鍵を保管する事務職として朝鮮人を雇用するだけであった。朝鮮文化に関する研究と、展示を担当する博物館の経営と、専門的な業務過程から朝鮮人を徹底して排除したのは何を物語っているのか。現地文化の研究から現地人を排除しようとする意図は明らかである。研究者と研究対象物の相互疎外によって、知識の創造過程とその結果の独占的な支配を意図した。これは博物館だけに

関わる事実ではない。総督府時代は植民地出身の学者を全く養成しなかった。それゆえ、ソウルと平壤では日本人専門家を抑留し、事務引き継ぎや発掘研究の知識を習得するほかなかった。総督府が植民地文化を独占的に管理するプロセスによって、現地文化は一種の一望監視監獄（panopticon）の姿につくられ、現地人が表象の植民地主義的歪曲（それが意図的であると否とに関わらず）を感じとることは困難になるのである。

総督府博物館の館報は『博物館報』の名称をもっており、国立博物館の館報は『館報』の名称をもっていているという違いがある。前者の発行者は、はじめは朝鮮総督府であり（第1号と第2号）、第3号と第4号は朝鮮総督府博物館が発行し、後者の発行者は国立博物館であった。総督府では『博物館報』の名称によって管轄部署を明示する必要があり、独立機関である国立博物館は『館報』という名称で、発行者と最終責任の所在とが国立博物館にあることを明示した。ここから、総督府が博物館を直接に経営したことがわかる。それは総督府の文化政策を、博物館という下部組織における研究調査機能を通して直接伝達しようとする意図を体現したものと考えられる。

アメリカ軍政下でも博物館の経営方針は、支配者による制約をさして抜け出すことはできなかった。「マッカーサー司令部文化部研究員チャップリン（Helen Chapin）が朝鮮美術研究のため来鮮し、文化教育部の指示で、当分の間本館で研究することにした。」[中略][1946年]8月28日、何の指示もなく、正午から建春門に巡査を配置し、一般観覧者の入場を禁止し[たため]、文化教育部と首都警察庁に建春門の警備と観覧者入場禁止に対して照会したところ、景福宮内の米軍宿舎の建築が始まり、軍当局の命令で警備するというものであったが、警備期間は予測できないという（中略）[したがって]当分の間臨時休館することに決定」（館報 1:4）、「景福宮の後援に米軍宿舎工事によって警備上臨時閉館されてからすでに9ヶ月が経過[中略][1947年]6月6日を期して開館することに」（館報 2:6）なった。「ローチ軍政長官逝去（1947年9月11日）に対して9月12日に[博物館では]弔辞を提出」（館報 3:3）した。総督府の直接的な命令を遂行してきた博物館は、解放後はアメリカ軍政のつまらない介入によって直接的な統率を受けた。

「修政殿西域収集品納庫：マッカーサー司令部からローチ長官に通牒があり、その命令に従って当分の間陳列よりも保管を主とする見地から陳列保管倉庫に格納することになった。（中略）西域収集品を取めた後、ここに石器時代および金石併用時代の遺物を専門に陳列するよう計画を立てた」（館報 3:6）。「当分の間」が50年を越える歳月となって、西域収集品は今も倉庫に格納されている。アメリカ軍政の計画は、い

まなお忠実に実践されているのである。そして、その場所には、大日本帝国によって任意に分散された先史時代の遺物を陳列し、朝鮮半島の歴史を先史時代にまで遡らせることによって、民族史の深さを表現しようと試みた。アメリカ軍政の意図とナショナリズム史観による見事な合作が、国立博物館に見られる表象だということができる。

アメリカ軍政当時の国立博物館は「国立」を名乗っていた。ここでいう「国」は、どの国を指しているのだろうか。大日本帝国の植民地から解放は達成されたが、まだ大韓帝国は成立していない。アメリカ軍部が運営する軍政下で、「国立」とは実際このうえなく曖昧な表現である。そして、重要な決定と事件に対する立場の表明はすべて軍政から直接に命令を受けていた。この事実について、現在の時点で国立博物館として客観的に立場を整理する必要があると考える。現在としては、政治的な過渡期の状況を表現する名称という程度の結論で、論議を終結させるほかはない。厳密に言えば、総督府博物館は廃止されてアメリカ軍政博物館となり、1948年の政府樹立以後、国立博物館になったものと理解すべきである。

したがって、1945年から大韓帝国政府が樹立される1948年までの間の「国立博物館」については、その性格規定をアメリカ軍政側の資料に対する綿密な検討に期待するほかはない。もちろん、国がまだない状態で「国立」という名称を使用したことは、すでに独立国を志向していたに違はなく、博物館が重大な政治的将来について積極的に表現したことに対しては、高く評価すべきであると考えられる。建国を希求する博物館と、その主役（金載元初代館長）の努力に対しては、国民の名で建国の功労を讃える勲章を授与することも無理ではないだろう。そうあってこそ、博物館とは政治的な場であるという主張が説得力を得るようになるのである。

「本博物館は倭政施政五周年記念物産共進会の美術館で旧景福宮春坊址に新築した煉瓦づくり二層一棟と旧景福宮の宮殿一部を利用して同年12月に開設 [された。] [中略] その後30余年間この博物館を中心に日本人がその本国ではあえて着手しえない規模の古墳発掘を南鮮西鮮など、その他朝鮮古文化の中心地で遂行し [た。] (中略) 軍国主義的植民地政策において文化事業の一つである博物館施設と運営には無理な点が多く (中略) 倭色を一掃し、面目を一新する準備の下で陳列館再開 (館報 1: 12) を試みる一連の行動があった。その行動に対する一つの呼びかけとして「開城分館、崔熙淳 [後日、国立中央博物館館長を歴任した崔淳雨である：筆者註] によって『残滓文献粛清の緊急性』という題目で館報に投稿があったが、館報の性質上、割愛したのである」(館報 1: 17)。博物館と学問、そして政治性が結びついた部分で、博物館という組織が限界を見せている。もちろん、このことは当時の朝鮮半島の政治的状況

が見せる限界と密接な関係をもっており、ここから博物館が政治性を避けることのできない場所であると感じられる。

「[国立博物館の] 施設は博物館本館（煉瓦づくり二層の建物で158坪）、新倉庫（25坪）、勤政殿と同回廊および勤政門（963坪）、慶会楼（坪数不明）、思政殿および同回廊（279坪）、萬春殿（33坪）、千秋殿（32坪）、事務室（旧慈慶殿）および同回廊（208坪）」（館報 1: 2）で構成されていた。この施設構成は1915年に総督府博物館が船出するときの基本骨格をそのまま維持しており、当時より新倉庫というものが一つ追加されていた。大韓帝国王朝の宮殿を総督府が占領してつくりだした建物構図を、アメリカ軍政下の国立博物館がそのまま引き継いでいることは、国立博物館を媒体として、王朝体制を認めないというアメリカ軍政の政治的意志を表現しているのである。少なくともアメリカ軍政は植民地支配以前の状態に復旧しようとする意志がないことを、博物館の配置を通して見せている。植民地主義の日本支配が帝国主義の米軍支配に引き継がれる様相が国立博物館の建物の継承からうかがえるのである。博物館従事者が望もうが望むまいが、それに関わりなく、それほど博物館は政治的な象徴物として作用していた。「倭色を一掃する」と述べているが、国立博物館は構成員（日本人から韓国人に）と行政地位上（係から独立機関に）の変化が主であって、展示の内容や建物、その位置については総督府博物館をほとんどそのまま継承している。

総督府博物館が朝鮮文化の中でも美術、とくに工芸美術に重点を置いて博物館を経営したのに対し、国立博物館は「歴史美術」を強調する。美術を博物館経営の中心に継承していることが指摘される。総督府博物館が重点を置いていた「美術」以外に「歴史」を付加したことは、新生独立国の火急な政治的要請から民族的アイデンティティをめぐる役割を博物館が担ったためである。その結果として生みだされた国立博物館のアイデンティティは「歴史美術博物館」といえるだろう。すなわち、国立博物館の「美術」は総督府博物館で強調しようとした「美術」と全く関係がないともいえるが、また違った一面からは、それをそのまま継承したともいえることを指摘したい。二つの立場の違いについては質的な評価がともなわなければならない。総督府博物館を完全に精算した後に国立博物館が船出するという形をとりえず、後者が前者を「接収」したという過程から必然的に派生した問題だと思われる。いずれにしても、国立博物館が総督府博物館を目に見える形で継承したことは明らかである。目に見えない内容面でどれくらい継承しているか（またはそうではないのか）については、批判的な立場からの評価が与えられることを望むところである。

1949年5月7日、国立博物館では第1回美術講座を開講した。先にも触れたが、博

博物館は美術分野を強調していた。一般国民、とくに青少年学徒に対して関連知識を普及させ、彼らの啓蒙に努めることを重大な課題にし、また教育的観点に着眼し、その最初の企画として大衆的で一般向けの美術講座を毎週土曜日午後を開講した。5月と6月にかけての6回の講座内容は「朝鮮の塔婆」(黄壽永)、「米国紀行」(金元龍)、「仏像の話」(関天植)、「東洋画の常識」(金塔俊)、「李朝木工芸について」(申應植)、「高麗陶磁器に関して」(崔熙淳)(館報 7: 5-6)であった。文化的なレベルでの民族主義的な運動が博物館から実践されていることがわかる。

「玉碎および条約文、本館所蔵貴重品特別展覧会：日韓併合とともに強奪された旧韓国時代の玉碎および対外各国との条約文書および合併条約文などは、在日本マッカーサー司令部から米国政府に返還され総務に保管された。そして、これを広く国民に展示しようとする当局の方針を継承し、その依頼を受け、それに関する大日本帝国物品が本館に交付されたのが1月19日であった。これに呼応して本館からも従来から陳列を躊躇していた貴金属および壁画などを特別展示し、民族精神高揚の一助となるようにした。そのほか国立博物館からも倭館図など日韓関係資料を多数出品する、前代未聞の豪華な展覧会であり、李承晩大統領をはじめとして」(館報 7: 11) 参加した。特別展は独立国であることを繰り返し主張し、民族精神を高揚しようという民族主義意図がきわめて強かった。民族的アイデンティティの確立という課題が植民地から脱した新生独立国には火急の政策的課題であった。博物館がこのような役割を受け持ったという事実に注目する必要がある。

「朝鮮総督府博物館では現在古美術を中心とする多数の貴重な発掘物その他の歴史的芸術品を収集 [した。] [中略] [しかし現在の博物館は] 収集品を陳列するにはあまりに狭隘で、博物館倉庫には (中略) 歴史的参考品が埋れて (中略) 世人に展示される望みはない」(博物館研究 3(10) : 7)。これは1930年10月の記録である。総督府博物館の中心的な関心が古美術と歴史的芸術品にあることがわかる。この方針は引き続き推進され、国立博物館もほとんどそのまま継承しているという。

それ以後、中央アジアの発掘品は倉庫のなかに保管される一方、博物館は考古部と美術部を両軸に運営してきた。それが民族主義的な博物館経営の姿であるということが出来る。総督府博物館の重視した工芸美術品分野が、そのまま継承されたのに対し、中央アジア発掘品を倉庫に保管する論理は、独立に引き続く新しい国家の形成に臨んで、博物館を主舞台として正統性と伝統性を確保しようとする民族主義から生みだされたのである。政治権力が入れ替わることによって、博物館が描きだす表象が互いに競合する様相を読みとれる。

1948年4月に発行された『館報』第4号の編集後記に載せられた関「天植博物監」の一文によれば、「博物館は確実にその使命が二つに分けられる。一つは確実な史料の展示であり、もう一つはそれに対する研究である（中略）この両者は後者から前者に発展していくのが当然で」（館報 4:16）とあり、当時、国立博物館は史料を中心とした展示の方針を力説している。すなわち、歴史博物館であるということを証言している一節である。国立博物館の開館半世紀を振り返った特集は、テーマを「美術史分野」と「考古学分野」に絞っている（博物館新聞 1995年9月1日付、289号）。1915年に総督府博物館として開館して80年がすぎた現在でも、国立博物館の主要な関心は美術史と考古学に集中している。その枠組みは総督府施設によってつくられたものであり、大きな変化なく引き継がれている。

「龍山の総督官邸を譲り受けて、博物館にしてはどうかといふ意見が総督府に台頭して、その実現を見る模様である。〔中略〕〔1910年に〕六十五萬圓を投じて建てられた（世に阿房宮と称される）御殿であるが、陸軍が持てあまして総督府に移管した」（博物館研究 4(9):7）。「〔恩賜記念科学館が〕倭城台に在る、旧庁舎を利用」（博物館研究 8(4):13）したという記録は1935年のものである。「国立博物館：解放後、日本統治時代の彼らの施政記念館（倭城台旧総督官邸）を利用し、我が国にまだなかった民俗博物館を創立、館長にはその方面の権威である宋錫夏が就任、1945年10月以後、館内設備陳列など、多大な準備に努力を尽くし、1946年5月に盛大な開館式を挙行了。同館は主に民俗品、自民族の生活史の材料を中心に陳列し、周辺民族の民俗品も比較研究上陳列」（館報 1:14）した。総督官邸を民族博物館につくりあげる象徴転換の試みが、それ自体で一種の表象である。民族が総督にとってかわる高度の政治的効果がある。民族主義が博物館を中心にわきあがった雰囲気を読みとることができる。この記録が歴史中心に展示を試みた国立博物館の館報であったことを勘案すれば、当時、民族主義という一つの枠組みの下で、国立博物館と国立民族博物館に明らかな役割分担があった。前者は歴史と美術、後者は民俗と人類学である。

総督官邸から恩賜記念科学館に、次にはその建物が国立民族博物館となったのである。総督から天皇、そして民族への象徴転換が成立するプロセスが博物館によって演出された。倭城台を博物館化する計画は、すでに総督府時代にあったもので、政治的状况によって延ばされてきた。それ以前には倭城台の場所に総督府博物館を移転する考えもあったようである。解放による政治的状况の変化の中で、宋錫夏はそのような総督府の計画を実践に移し、その場所に国立民族博物館を建設した。

国立博物館の性格とアイデンティティの確立という問題には、「まず南鮮アメリカ

軍政下において歴史美術博物館を総合強化したこと」(館報 1:2)がある。国立博物館の性格を歴史美術中心につくるという意志がはじめからあったことがわかる。その根拠は、国立博物館と同一時期に宋錫夏中心の国立民族博物館が準備・開館されたからである。国立博物館は歴史と美術分野を中心に、国立民族博物館は人類学を重点的に経営するという役割分担の面で、バランスを保っていたと判断される。しかし、1950年の朝鮮戦争を理由にして国立民族博物館が国立博物館に吸収されて以来、国立博物館は国立民族博物館に由来する人類学の内容を含んでいるにもかかわらず、現在に至るまで国立民族博物館の内容を放置していると指摘できる。国立博物館は歴史美術を中心に出発し、その方向でのみ発展してきたということになる。したがって、国立博物館における考古学的研究と展示、そして研究者の養成は、事実上歴史研究のための手段だったという評価が可能である。歴史を重視した博物館が韓国における考古学研究を方向付ける舵取りの役割をしたために、後年に登場する韓国考古学の主流は歴史学が要求する方向の業績生産に力を注いだ。そのようなオリエンテーションの所産は政治的な要求によって正当化され、民族主義的な傾向とも一致した。結局のところ、韓国の国立博物館は民族主義的な史学と民族主義的な政策が結合して作りだした産物である。新生独立国である韓国における国立博物館をはじめとする博物館は、一般的に民族主義的性格をもつほかになく、その傾向は現在も強く持続している<sup>5)</sup>。

民族的アイデンティティの確立が足元に落ちた火のように急いで対処すべき新生独立国の状況においては、文化相対的な思考を要求する人類学の確立は、贅沢と見なされても当然であった。独立解放と朝鮮戦争の間にしばらく存在した人類学の博物館も、実際はその名称が国立民族博物館であったことに注目する必要がある。その英文名が **Museum of Anthropology** であったことは、当時の政治支配権力がアメリカ軍政にあったことを想起させる。この名称はアメリカ軍政の保護を受けていたのであり、軍政が終息し、独立国宣言、そして戦争の危機的な状況で、人類学博物館はそれ以上の存在理由が保証されることはなかった。歴史と美術の概念によって武装した韓国の国立博物館システムは、いまだ人類学に門戸を開く考えをもたない。韓国の国立博物館体制はいまなお1950年の展示状況が続いているのである。

日本人収集家の収集品は、アメリカ軍政当時に「敵産美術品接受」という名前で「慶州博物館に移管された」(館報 1:9)。個人の掠奪によって個人資産となった文化財と美術品には「敵産」という名前が付けられたことに注目する必要がある。「私のもの」であった文化が、敵によって一度掠奪を受けた後には「敵の財産」という認識が植えつけられるプロセスが、ここにはある。文化掠奪と文化毀損のプロセスに媒介さ



れる認識の転換は、究極的に「私」を「敵」と見なす混同状態を招くことで、「私」のアイデンティティを否定する結果を生みだすに至った。脱脈絡化による文化毀損(cultural mutilization)が行きつくと、自己のアイデンティティを確認し学習しうる文化を自ら否定することで、結局は自分の存在を否定する結果を生みだすのである。これは民族主義的な文化の再脈絡化の、一つの問題点である。

「民族主義的な運動は19世紀後半に大きな変化を経て、それが大衆運動に転換した。大衆のための学校の出現と大衆が中心になってつくった祝祭のプロセスの中で、博物館と展示が中心的な役割を果たすようになった」(Prosler 1996: 34)。博物館はもはや少数の貴族階級や植民地政府、金持ちの商人層だけの専有物ではない。大衆主義的な博物館が現れたのである。このように見れば、韓国では、ようやく大衆主義的な博物館の出現が予告され、実際にそのような兆候がすでに進んでいた。たとえば、キムチ博物館や会社の博物館、そして自治体の博物館が「雨後の筍」のようにつくり、今もまさにつくりようとしている。問題は、このような大衆主義的な博物館が先行の民族主義的な博物館に対する反省もなくつくりだされる過程で、大衆主義と民族主義が結びついてできる極端な自民族中心主義が広範囲に広がることである。

一般的な現象として、国立の博物館は大衆主義的な博物館の模範として採用されており、行政的な指導もその方向に動いているが、その一方では、南北の分断という特殊な政治的状況の中で正統性の競争という問題が生存レベルで与えられる変数として作用しているために、そして第三の問題としていまだきちんと精算されていない、また均衡がとれていない過去の植民地支配関係による日本との競争関係のなかで、大衆化された自民族中心主義は文化のアイデンティティの具象化に深刻な問題として残っている。過去に植民地被支配関係で形成されたコンプレックスを、民族分断という悪条件の中で克服しなければならないという条件の逆作用が、未来への動きに困難な障害物として立ちはだかっている。

世界の博物館は一般的に世界主義的博物館の方向へと動いてゆく傾向があるが、韓国の博物館は韓国に特殊な政治的状況によって、世界主義的博物館の門前で解決せねばならない別の政治的アフォリズム(aphorism)に、閉じ込められているわけである。一つ明らかなことは、大衆化された自民族中心主義の広がりである。この枠組みも一つの政治的な現象であるために、支配とヘゲモニーの中で強力で作動する。世界政治の流れのなかで、あるいは自民族中心主義が大衆化された状況にあって、異端として単独であり続ける力をもつこと(それがどれくらい続くかは疑問であるが)。朝鮮半島におけるグローバル化の一環として、このことを実践する場としての世界主義

的博物館の登場は、相当な試練を受けるほかないものとする。

## 5. グローバル化と未来化の博物館文化学——文化の原脈絡化——

19世紀までは植民地主義的な博物館が流行していたのであれば、20世紀には民族主義的な博物館が過去に対する反動として登場した。文化的プロセスというレベルで見れば、文化の再脈絡化にあたるものが二通りあった訳である。強力な政治的意志が支配と権力、そしてヘゲモニーの問題を取り囲んで博物館に投影した時代であった。そのプロセスで文化の真性 (genuine, Edward Sapir (1918) の用語) な姿は遮られてもいた。再脈絡化のプロセスを通して文化は違った目的を達成するために包装され、ガラスケースの中に閉じ込められてしまった。閉じ込められている文化は、沈黙する代価として莫大な資金を消費していることも事実である。

21世紀の博物館は、どのような位置を占めることができるのであろうか。正確な意味についてはいまなおさまざまな主張が飛び交っているが、われわれが突入しようとする21世紀の暮らしの展望は、おおよそグローバル化と未来化 (futurism) というキーワード(このようなキーワードは大半が希望的観測を盛り込んでいるのも事実である)によって操作されているようである。ここでは、「世界的な相互依存と世界的認識の方向で動く実質的な形態としてのグローバル化」(Robertson 1990: 22)をいい、西欧化や近代化を目標とする文化変動の形態ではなく、人類の未来指向的な動きとしての未来化というキーワードを使っていきたい。

博物館はこのようなキーワードを実践する場、そして21世紀の暮らしを先導する研究と実践の可能性を見せる場となることができる。この可能性を実現するもっとも基本的な課題が、沈黙している「もの」にとにかく語らせるようにすることである。「もの」が思いどおりに声を出すようにするためには、もともとの故郷に帰してやらなければならない。それでこそ思いどおりに声が出るのである。筆者は、このプロセスを文化の「原脈絡化」と定義する。文化的プロセスの流れで見れば、原脈絡化は一種の再脈絡化であり、特殊な形態の再脈絡化である。なぜなら、文化が化石化しないかぎり、文化的プロセスは途切れることなく再脈絡化によって変転していくからである。

最近では、望ましい現象が博物館とその周辺で働いている知識人によって進められている。いわゆる文化財のうちで宗教的象徴を本籍地に返還 (repatriation) する動きである。「1989年、米国議会は、国立自然史博物館に遺骨とそれに関連する埋葬遺

物とを先住アメリカ人に返還すべきことを命ずる法令 The National Museum of the American Indian Act, Public Law 101-85 を可決した。[中略] その後、さらに踏み込んだ法令 (The Native American Graves Protection and Repatriation Act, Public Law 101-601, 1990年) を可決した。それは、『文化的資産』(cultural patrimony) と聖物の返還を命ずるものである」(Talbot 1995: 5-6)。文化財と見なされて博物館に閉じ込められた収集品をもととの主人に戻す返還行為に対しては、賛否両論さまざまである。その収集品がもともとあった状況に対する懐古と、博物館や別の場所に移す過程に対する追跡は、道徳的な判断を避けることができない。また、「奪われた」といってもよい収集品が、現在は包装されて博物館に展示されたり、博物館に似た場所の倉庫に閉じ込められている状況に対しても、道徳的な価値判断が避けられない。

返還とは一つの事件的な行為である。奪取に対する反対給付の行為である。そのような行為が連続的に実行可能になる前提条件を考えるならば、われわれは返還という行為が一回切りではなく、連続的な文化的プロセスへと構成することができ、そのような文化的プロセスが究極的に文化と伝統の再創造に画期的な寄与をすると期待することができる。事実、博物館に集められたものは空間性も時間性もすべて失われたまま、捕虜の身になったと見るのが妥当だろう。その収集品に対して空間性と時間性を付与しようとする努力、すなわちその収集品が置かれていた脈絡のなかに、その収集品を置き戻すことが、われわれの自覚的な努力によって可能である。ちょうどもともとの空間と時間の脈絡を失っていくプロセスが人間によってなされたように、今はその逆のプロセスが可能なのである。

返還という行為が博物館をして文化財に対する統制権を放棄させるという認識のため、大部分の博物館や類似機関では、返還という行為は考えたくもないという傾向が強い。

そのような考えは、返還というものを一回切りの事件と考えているためである。筆者は返還という行為は、文化的プロセスを構成する一連の行為の一つと考える。博物館によって収集され展示された期間自体が、収集品と博物館との関連を意味するのであり、その過程でも文化的プロセスが進んでいたことは否定できない。したがって、どのような収集品を保管した博物館も、程度によって、収集品に対して干渉できる権利もっているのである。その収集品がどの場所にあるのかについては関係なしに。ある子供が生みの親から引き離され、育ての親によって長い間育てられたという例ならぞらえて考えれば、生みの親がその子供に対する親権を失っていないように、育ての親もその子供に対してさまざまな権利もっているのである。

返還という行為を違った側面からも検討してみる必要がある。返還によって、「もの」の固有性 (authenticity) ないしその本来の意味が回復されるという期待に問題はない。むしろ、「[遺物の返還にもなる変化の中で] 博物館にとってもっとも重要なことは、文化財とその情報に対して博物館が行う関与 (access) を、博物館自らの程度まで管理 [し、どの程度まで現地人社会に譲る] のか、その妥協である (中略) 博物館は、異文化のより完全な理解のために、人々と諸施設の間の知識の相互交換を一層促進すべきである。[中略] 文化財の返還は、博物館と地域社会や文化センターの間で新たに情報の相互交換関係を結ぶ発端と見なすことができる。[中略] 返還と交換は、それゆえ、集団と [博物館などの] 施設との間に関係を成立させ、一層強化させる機能を持つのであり、両者の関係を切断するものではない」(Bonshek 1995: 273-274)。文化財の固有性は、最初にその収集品が脱脈絡化される時点ですでに変質されてしまっている。このプロセスがあったがゆえに、その「もの」の意味を博物館が再脈絡化しえたのである。

返還によって固有性を回復することは、論理的にありえない。ただ、この時点でわれわれには唯一、返還とそれにつながる一連の行為が文化を原脈絡化しようと期待することができる。それゆえ、固有性の回復というレベルではなく、文化の再創出というレベルで、返還を検討することが望ましいと考える。

収集品として閉じ込められた文化財が、本籍地である故郷に返される事件が不均衡に進行しているようである。個人収集家が比較的熱心にこの努力をしているが、博物館が原脈絡化に対して煮え切らない態度をとっていることも事実である。

個人収集家の文化財寄贈行為に対する一般的な認識と解釈は、非常に政治的な形で推移している。たとえば、「朴秉来博士の李朝磁器に対する高い眼識と深い愛は、すでに1930年代から世間に知られていた。当時、韓国社会では李朝磁器の美しさを正しく理解し、それを大事に育てようとする鑑賞家や収集家の数は、きわめてまれであった。招かざる客であった日本人の方がむしろ一歩先を行き、李朝磁器の美しさに目を向け、李朝磁器収集に長けていた。現在、国内よりもむしろ日本に数多くの李朝磁器の名品が集まっているのも、そのような理由からである。いってみれば、朴秉来博士は彼ら日本人愛陶家がのさばる中でしっかりと李朝磁器の佳作を選びすぐり、またそれを自らが集めて保管することによって、また違ったレベルで中身のある文化的抗日に寄与した人物である」(崔淳雨 1974: 1)。骨董品収集が文化的抗日と解釈されるこの現在の状況には、まさに植民地主義と民族主義とが行きかっている。

「1980年12月に収集文化財献納書を提出した故李フングン先生は早くより韓国古美

術に対する眼識を高めることで、一生を韓国古美術品の鑑賞と収集に多大な情熱を降り注ぎ、壮年期以後は、文化財の国外搬出など散逸していく民族文化遺産の収集保存が緊急であるという判断のもとで、その収集に莫大な財力を投入した」(1981.1.1. 博物館ニュース)。「李元淳翁は解放直後の1949年、アメリカに在住中ながら、日本を経てアメリカに流出していった文化財がアメリカ人の手に渡っていく事態を憂慮し、これら文化財を購入したのであるが、以後30余年間(中略)銀行に保管しておいたのが、1979年から1981年までに行われた『韓国美術五千年展』のアメリカ巡回展を契機に、これら文化財をアメリカ現地で寄贈し、これと合わせて国内で収集した21点の文化財も寄贈した」(1982.3.1. 博物館ニュース)。「李養璿博士の寄贈文化財は、国立慶州博物館に特別展示された」(博物館新聞 1986年9月30日付)。「金ヨンドゥ翁収集文化財帰郷特別展、在日僑胞金ヨンドゥ先生が日本で収集した韓国文化財を一カ所に集めた」(博物館新聞 1994年6月1日付)。

「日本人医師で、古瓦研究家の井内功氏が、『日韓親善をはかって韓国のものは韓国に帰そう』という考えで昨年11月5日、寄贈した我が国の昔の瓦や煉瓦などを一カ所に集めた常設展示室が整えられ(中略)解放後韓国を60余回も訪れながら血のにじむ努力でこれら遺物を収集」(博物館新聞 1988年3月1日)。「八馬理氏が遺物383点を寄贈、この遺物は1920・30年代に所蔵家の父、故八馬兼介氏によって収集されたもので、所蔵家が父から譲り受け、保管してきたが、日韓両国の親善のために一切の条件を付けずに寄贈したものである」(博物館新聞 1995年10月1日付)。

「日本人青山慶示先生が所蔵してきた8件の敦煌遺物を中国敦煌研究院院長に譲り渡した。(中略)これらは莫高窟藏経洞で一世紀前に流失したものである。外国人として、この度一番早く敦煌文物を中国に復帰させた事例である」(李江 1997)。敦煌文物については、その資料の貴重さと珍しさのゆえに、後日多くの複製品がつくられたことを看過できない。故郷に帰るものなかには複製品がある場合もありうるため、文化の原脈絡化を推進するには、厳密な検証が欠かせない。

「動物病院院長である金ヨンホ氏が(中略)360点を国立清州博物館に寄贈した」(博物館新聞 1991年3月1日付)。寄贈という美しい行為によって本籍地に帰ることもあるが、全く関わりのないところの展示室に再び閉じ込められることもある寄贈された「もの」については、本籍地を正確に把握したうえで、その本籍地に戻すという原則を厳守すべきである。散らばったかけらが一ヶ所に集まれば、研究者によって本来の文化財復元の可能性を一層高めることができる。

「カイロのエジプト博物館や(中略)アテネの国立考古学博物館でも同様に、『本

当によい遺物はすべてなくなり、かすだけが残った』というやるせなさをかき消すことはできない。この両国の国宝級文化財はとんでもないことに大部分がイギリスの大英博物館とフランスのルーブル博物館に所蔵されている。(中略)すべて掠奪を受けたり、売り飛ばされた文化財である。(中略)最近、匿名の日本企業のある人物が学術的芸術的価値の高い韓国文化財377点を我が政府に寄贈したという話が伝わってきた(高光植 1994: 3)。「世界各国に散らばっている韓国文化財は64,000余点に及ぶという。日本にあるものだけでも、その半分に近い29,000余点にもなる」(高光植 1995: 3)。このような現象はまさに世界的である。強制移住と掠奪による文化的不均衡のありさまは、現在、世界の博物館が秘めているもっとも深刻な矛盾であるといえる。この矛盾を抱え込んだままグローバル化や未来化を論じることは、共存しようとするのではなく、現在うまくやっている者だけがこれからもずっとうまくやっていこうという話でしかない。

「全羅南道長興にある宝林寺の石塔内で発見された物品を一括して1934年以来景福宮内に保管してきた同寺住職の要求で、米軍政府が塔内において原状への復旧を指示し、1946年8月26日全部返還」(館報 1: 7)したことは、本籍地から切り離された文化財の再脈絡化を試みた事例としてあげられる。最近では、「光州[市]春宮里の鉄製釈迦如来坐像を本籍地に移転、この像は1911年に国立博物館に収蔵された後、1959年に宝物第332号に指定され、1985年には旧朝鮮総督府の建物の2階、仏像彫刻室に移して展示されてきた。高さが281センチ、重さは6.2トンの巨大な鉄製の仏像で、10世紀の代表的な作品である」(博物館新聞 1996年7月1日付)。珍しくも実現される本籍地への返還と原状復旧の過程は、綿密な検討を経て規定された基準にしたがって、体系的に進めなければならない。毀損された文化の本籍地復帰による原脈絡化という課題は、一定の原則と基準、そして具体的な方法が法的手続きと法的保証によって推進することが望まれる。万一この問題に対して積極的な検討と実践をなさないならば、博物館は文化の脱脈絡化の主役であると同時に、倉庫の標本という非難を免れることができないだろう。

韓国における国立中央博物館中心の遺物の集中は、最終的に中央と地方の不均衡発展という問題を引き起こすだろう。地方の遺物をソウルに集中させることによって発生する地方文化財の剝奪および毀損現象が発生する。中央に集中させることによって結果する文化民族主義は、地方文化の破壊という不均衡な様相を生み出す。したがって、文化財は本籍地に戻すことによって、その文化の時間的空間的意味を取り戻すことが可能な脈絡をつくりあげる。そして、該当する地方文化の脈絡の中で文化財を再

解釈する機会をつくるのが、住民の立場からも望ましいのである。

国立博物館 (National Museum) に避けることのできない本来的な矛盾は、展示品を通して表象しようとする事と、実際に展示品によって表象されることとの間の差異から始まる。国立博物館、とくに中央集権化された国家の国立中央博物館は、「中央」という権力を行使し、「地方」の遺物と甚だしくは遺跡自体を本籍地から強制移住させることによって、中央のヘゲモニーを表象する。そのプロセスで「地方」の文化は脱脈絡を通じた毀損の運命におかれており、同時に中央の一ヶ所に集められた地方の文化を互いに連結させるのに困難をとめないながら「捕虜収容所」の生活を強制する。地方の文化は中央が誇示する権力のための装飾品としての役割をもたされ、その本来の意味を喪失するようになる。このようなプロセスを通して形成された博物館は、中央と地方という社会的位階性を通じた文化の階級化と中央の政治的権威を正当化し、最終的にはこのすべてのプロセスが有機的に関連しながら、自らのエネルギーの確保を土台にして、一種のヘゲモニーの拡大再生産体系をつくりあげる。

「博物館は全地球的な政治的文化的プロセスからだけではなく、地域的で特殊な民族主義的な政治の経験からも噴き出した、想像の共同体 (imagined communities) である」(Hamlish 1995: 29)。このハムリッシュの論理は、国際的なレベルでだけでなく、国内的なレベルでも適用される必要がある。ある地方に蓄積された独特の文化的政治的経験は、その地方で形成される想像の共同体としての博物館に、滋養分を提供しなければならない、またそうするはかないのである。

「国立博物館は地域博物館を調停する (coordinating) 役割をしなければならない」(Adedze 1995: 63)。干渉し統制し君臨する役割ではなく、個別の地方博物館の特性発揮を助け、地方間の関係を媒介し、全体が体系的に連携できるよう仲介者の役割をすることが望ましい。新羅の文化を習うには慶州を中心とする地域を訪れるように、その地域の地理的環境的与件とよく調和した歴史的な学舎としての博物館を準備することである。

100余年前に江華島の外奎章閣の文書を奪っていったフランス人が、今になってその文書を返すことはできないと強く主張した。その理由には、韓国側の保管能力に対する危惧も含まれている。過去に現地できちんと保存されていたものを強奪した点については一言半句の言葉もなく、フランスの責任司書が辞職も辞さないという脅しをしながらも、原脈絡化を拒否するとは、考えてみなければならない問題である。現地に文書を返すとして、かりにその現地の保存能力に問題があると考えるのであれば、その文書が原脈絡化された後に、現地で保存が完璧にできるよう支援体制を準備する

責任は、どこにあるのだろうか。

大きな流れとして、文化の原脈絡化は推進せねばならず、それにともなって生じてくる問題は、引き続き検討しなければならないと考える。植民者や先祖や先輩が犯した文化の脱脈絡化の強奪行為に対する最低限の贖罪方法は、文化の原脈絡化である。21世紀に博物館と関連分野の専門家が果たさなければならない責任がここにある。もちろん、これに付随する限界という問題もある。本籍地に返還しようとしても、本籍地が不明である場合もあり、本籍地の環境が劣悪で、保存に問題があることもあり、資金の問題がつきまとい時間が遅れる場合もある。このような諸々の問題に対しては改めて考えなければならない。専門家という集団は、このようなときのために存在するのではないだろうか。明らかなことは、文化の原脈絡化という原則を立てることが、望ましい未来化とグローバル化の博物館の姿であると考えられる。

「文化財保護法によって全国から出土した埋蔵文化財が、国庫帰属手続きを経て国立博物館が管理するようになり、文化財保護機関としてきわめて重大な機能を遂行している」(李康承 1995: 6)。文化財保護という方法において脱脈絡化された状況での保護と、再脈絡化された状態での保護とは、区分せねばならない。可能なかぎり脱脈絡化をさせず、再脈絡化の努力を進めたうえでの保護が、文化財を保護する意味をさらに忠実に達成しうるのである。

原脈絡化のためのいろいろな環境づくりは分野別(法的、技術的、金銭的など)の専門家集団によって十分に講究すべきである。すでに部分的には、本籍地から強制離脱を受けた遺物を本籍地に返すことで、文化財の生命力を回復しようとする努力のあることは、すでに見たところである。植民地主義的博物館によって脱脈絡化された文化財を、民族主義的な博物館において「脱」脱脈絡化(de-decontextualize)することによって、文化の原脈絡化(proto-contextualize)を実践するプロセスも、このような努力の一環と評価することができる。しかし、植民地主義のイデオロギーの競争合いの場となってしまった博物館は、文化の再脈絡化が循環する様相を見せることもある。このようなプロセスの重層的な歴史のなかでイデオロギーの競争合いの犠牲に転落する文化のまがいもの化が、もっとも憂慮されることである。文化の原脈絡化を試みなければならない理由はまさにこの点に、つまりまがいもの文化を抜け出すことによって個別文化の自律性を回復しようすることにある。

「文化的自律性(cultural autonomy)とは、文化的特有性(specificity)に対する権利と文化内部から仲介されることではなく、内部から証言される自身の起源と歴史に対する権利を意味する」(Todd 1990: 4; Ames 1994参照)。博物館の展示委員会に



現地の人々の観点を導入することで、新しい展示を企画することは、決して「内部から証言された自身の歴史」の水準に及ぶものではなく、「内部から仲介された」水準である。文化的自律性の可能性を実現するように努力することが、未来の博物館が旗印に掲げるべきグローバル化 (globalization) と人間化 (humanization) の方向なのである。

## 6. 結語——新しい博物館のために——

技術の発展は、博物館の悩みをかなり軽減させる方向に利用されている。大衆のための技術を活用することによって、博物館にとって情報とメディア技術を通して、大衆との接触を一層深めることができる。そのようにして形成されるネットワークは、異なった部門で進んできているグローバル化の推進に、博物館も一定の寄与をなすことを可能にするだろう。このような状況で、われわれは問いかけを含んだ二通りの提案ができる。一つは、いつまで博物館は「もの」だけに執着しなければならないのかということであり、もう一つは、博物館は「もの」をこれからもずっと沈黙の状態に閉じ込めておかなければならないのかということである。これらの問いかけを一つにつなげて解決しなければ、博物館が存在する意味自体が深刻に問われてくると見られる。

存在の意味を損なうことなく、文化的自律性の回復に先立つことができる新しい博物館 (new museum) は、どのような方向で可能なのだろうか。掠奪した「もの」、その「もの」を博物館に保管することで本籍地の文化が毀損してしまった場合、それは本籍地に返さなければならない。博物館は「もの」に執着する必要はない。「もの」の固有性を回復することが原脈絡化の目的ではなく、文化の自律性を回復することが原脈絡化の目的でなければならない。

「もの」に執着する度合いが強ければ強いほど、博物館はこの世でもっとも物神主義を盲信するところに転落してしまうだろう。いや、すでにそうなっているがゆえに、あらゆる知恵を動員して、「もの」に執着する博物館から抜け出せる方案を探っていかなければならない。博物館は、「もの」に関するすべての情報を蓄積し、必要なときに研究者に供給し、興味をもつ人々に提供する役割をすればよい。「もの」から情報に比重を移していくことが、新しい博物館の未来像であろう。ハイテクと新しいメディアを通して、博物館の中心的な役割は情報に関するものに移さなければならない。原脈絡化の進行とともに、博物館は「もの」が抜けた後を情報で埋め合わせなければ

ならない。博物館から博情報館に（梅棹 1992: 255; 1993: 409, 441）という提案は、未来の博物館が深く考えて実践しなければならない課題なのである。電子化された情報技術は、それを実現する可能性を秘めているのであり、博物館への適用を真剣に検討する必要がある。すなわち、博物館が情報技術およびニューメディア分野と積極的に提携していくことを検討する必要がある。

「グローバル化（globalization）は、全人類をして個人的には決して解決しえない共通の問題群に直面するという自覚を含んでいる。（中略）また、グローバル化は地球共同体の力と、文化的特殊性や民族的文化的破片性と同質性の力との差に存在する緊張を通して、その自らを表現している」（Guibernau 1996: 131）。グローバル化に内在されている自覚と緊張は、未来に向かうファクターを構成しているのに違いない。グローバル化と文化が会うところでは、自覚の認識と緊張の行動がともに作用する力の均衡がある。どの方向に動いていくのかという選択は、究極的に人間が行う。人間が集まった組織が行う。グローバル化時代の全地球的な組織は、過去の組織が犯した間違いを反復しない責任がある。たとえば、ICOM やユネスコがそのような組織のうちの一つである。これらは、民族的境界と全地球的空間の間の緊張を解消し、たとえば民族的アイデンティティ（national identity）に対して世界的アイデンティティ（global identity）を実践することによって、未来のために自覚的にグローバル化の課題を実践していく義務があるのである。

本籍地還元によって文化を表象する新しい形態の博物館が必要である。19世紀20世紀の帝国主義と植民地主義を精算し、新しい世紀を迎える心地よい立場を人類の事業として展開することが博物館の任務といえる。新しい人類文化の表象のために。

人間だけが捕虜になるのではない。文化も捕虜になる。博物館の中で捕虜になった文化が永遠に捕虜の身分で残されることは、いわゆる理性をもった文明社会が目指す方向ではない。捕虜となり沈黙した「もの」を故郷に帰すことで、生命力を取り戻し、文化的自律性を回復できるようにすることが、真の文化の再創出のための礎石になる。近未来の博物館に与えられた責任がここにある。

## 謝 辞

本稿は International Symposium on Representing Cultures in Museum (Japan Foundation, Tokyo, October 25, 1997) での発表のために作成した草稿である。この草稿を仕上げるにあたって、国立民族学博物館の栗田靖之先生、田村克己先生、そして世田谷美術館の川口幸也先生の

激励と忍耐が大きな力となった。資料収集過程で助けて下さった Robert Winthrop 博士と国立民族学博物館図書室の職員、そして草稿の段階でコメントをいただいた東京大学博物館の木下直之先生にも感謝の言葉をささげる。また、本稿を日本語訳するのに、総合研究大学大学院生の林史樹君の助けを得た。しかし本稿の内容はすべて筆者の責任であることはいうまでもない。

## 注

- 1) 「遊就館は靖国神社境内に在り、(中略) 明治十四年の創立にして翌年二月より開館す、館内には古今の英雄が幾戦場に使用したりし武器並に戦利品を陳列せり、館名は笥子に“君子居必擇郷、遊必就土、所以防邪僻而近中正也”とあるに據れる」(画報生 1905:3)。明治14年は1881年である。「社寺に付設されてゐるこれ等の宝物館の主なるものは、高野山靈宝館、日光東照宮宝物館、大山祇神社宝物館、北野神社宝物館、明治神宮宝物館、靖国神社付属遊就館等である」(日本博物館協会 1932:3)。遊就館は神社に属する代表的な博物館の形態として認識されていることがわかる。その所在地は、東京市麴町区九段靖国神社境内で、明治12年靖国神社祭神遺物の陳列所として建設された。収集品は、主に武器およびそれに関する図書類で、戦役記念品なども含めて約2万点が陳列されている(日本博物館協会 1932:16-17)という。また別の資料からは、靖国神社宝物遺品館の収集品は、遊就館が昭和20年11月に廃止になったため、移管されたものであり、戦災や接収のため資料の一部は失われたが、1961年4月宝物遺品館として再び開館したことがわかる。武器武具類1000余点、書画類60余点、宝物類20余点、遺品遺書類700余点など、4000余点を収蔵している(日本博物館協会 1978:451)。
- 2) 稲葉岩吉(1876-1940)が本名であり、君山はその号。東京外国語学校(現東京外国語大学)で中国語を習い、中国に渡って日露戦争当時には陸軍の通訳として従軍した。1909-1915年の間には、南満州鉄道の歴史調査部に勤務しながら『満州歴史地理』編纂に参加した。1915年に陸軍大学に教官として就任した。その後、1925-37年に朝鮮総督府修史官として朝鮮史編修会で『朝鮮史』全37巻の編纂事業に従事した。1937年、満州の建国大学教授に就任した。
- 3) 日本の明治時代からあった官吏の身分上、等級として天皇の勅命によって任用された官吏である。高等官等俸給令の規定によれば、高等官(勅任官と奉任官の総称)1等と2等を勅任官といった。
- 4) 高等官(注3参照)のうち、3等から9等に該当する官吏職である。奉任官の任免は内閣総理の奉薦によって天皇の裁可を経由し、任命される。奉任官の下が判任官であった。
- 5) 韓国博物館の現況は次の通りである(文化体育部 1995参照)。博物館には登録博物館、国立博物館、大学博物館の区分がある。登録博物館は、究極的に個人や団体が設立した公私立博物館をいう。博物館および美術館振興法(1991年11月30日、法律第4410号)によれば、国立博物館、公立博物館、私立博物館の区分がある。国立博物館には、国立国楽博物館、国立慶州博物館、国立公州博物館、国立光州博物館、国立大邱博物館、国立民俗博物館、国立扶余博物館、国立ソウル科学館、国立全州博物館、国立中央科学館、国立中央博物館、国立晋州博物館、国立清州博物館、国立現代美術館、宮中遺物展示館、山林博物館、外交博物館、郵政博物館、李忠武公遺物展示館、晋州山林博物館、鉄道博物館、通信記念館、海洋遺物展示館がある。大学博物館は81館、そのうちの大部分は考古、美術、民俗資料であり、大学の特徴にしたがって形態に若干の幅がある。たとえば、士官学校の軍事関係資料、女子大学の女性風俗関係資料、キリスト教大学のキリスト教関係資料、水産大学の水産関係資料など。登録博物館は74館、相当数が専門分野の特殊性を活かしている。規模が小さい私設博物館は、特定のテーマに重点を置く傾向があり、主に個人が収集した所蔵資料を基礎にした博物館であるために、特定種目に限定されることが多い。出版、農業、石炭、巫俗、衣装、キムチ、家具、デザイン、陶磁器、船、教育などの種目に分類されている。登録博物館のなかでも総合博物館の性格を帯びているものは、地方自治体が設立した公立博物館であり、私立博物館は大体において専門化している。

## 文 献

### 中国語文献

- 李 江  
1997 「外国人首次将敦煌文物送達中国」『人民日報（海外版）』1997年10月11日付。

### 日本語文献

- 有光教一  
1997 「私の朝鮮考古学」姜在彦・李進熙共編『朝鮮学事始め』pp. 159-247, 東京：青丘文化社。
- 朝鮮総督府  
1926～ 『博物館報 (Government-General museum bulletin)』
- 藤田亮策  
1932 「故山田針次郎氏収集品」朝鮮総督府博物館『博物館報』3, pp. 1-3。  
1933a 「故関口半氏収集品に対して」朝鮮総督府博物館『博物館報』4, p. 7。  
1933b 「鮎貝房之進氏収集品について」朝鮮総督府博物館『博物館報』4, p. 18。
- 画 報 生  
1905 「遊就館の鹵獲品陳列」『風俗画報』318, p. 3。  
1906 「靖国神社内の北韓大捷碑」『風俗画報』338, p. 44。
- 岩佐彦二  
1931 「朝鮮恩賜科学館施設状況」『博物館研究』4(9), 4-5。
- 日本博物館協会  
1928～ 『博物館研究』  
1932 『全国博物館案内』東京：刀江書院。  
1978 『全国博物館総覧上巻』東京：きょうせい。
- 佐藤明道  
1938 「李王家美術館成」『博物館研究』11(7-8), p. 1。
- 椎名仙卓  
1989 『明治博物館事始め』東京：思文閣。
- 匿 名  
1906 「三好將軍の朝鮮土産」『風俗画報』333, p. 31。
- 梅棹忠夫  
1992 『知の技術』（梅棹忠夫著作集 第11巻）東京：中央公論社。  
1993 『研究と経営』（梅棹忠夫著作集 第22巻）東京：中央公論社。

### 韓国語文献

- 高 光植  
1994 「寄贈文化財」『博物館新聞』276, p. 3。  
1995 「海外流出文化財還収有感」『博物館新聞』292, p. 3。
- 国立博物館  
1947～ 『館報（のちに『博物館ニュース』、『博物館新聞』に改名）』ソウル。
- 文化体育部（編）  
1995 『韓国の博物館および美術館——登録博物館および美術館観覧案内』ソウル：ピア。
- 李 康承  
1995 「国立博物館の社会的役割」『博物館新聞』290, p. 6。
- 李 慶成  
1971 「仁川市立博物館創設事情（1）」『博物館ニュース』13, p. 4。
- 崔 淳雨  
1974 「朴秉来博士収集李朝磁器の寄贈を迎えて」『博物館新聞』39, p. 1。

歐文文獻

- Adedze, Agbenyega  
 1995 Museums as a tool for nationalism in Africa. *Museum anthropology* 19(2), 58-64.
- Ames, Michael M.  
 1994 The politics of difference: other voices in a not yet post-colonial world. *Museum anthropology* 18(3), 9-17.
- Bonshek, Elizabeth  
 1995 Objects, people and identity: an interplay between past and present at the Australian Museum. In Tsong-yuan Lin (ed.) *Proceedings of the International Conference on Anthropology and the Museum*, pp. 261-282. Taipei: Dept. of Anthropology, Taiwan Museum.
- Brown, Richard Harvey  
 1993 Cultural representation and ideological domination. *Social forces* 71(3), 657-676.
- Foucault, Michel  
 1977 *Discipline and punish: the birth of the prison*. New York: Pantheon Books.
- Guibernau, Montserrat  
 1996 *Nationalisms*. Cambridge: Polity Press.
- Hamlish, Tamara  
 1995 Preserving the palace: museums and the making of nationalism(s) in Twentieth-Century China. *Museum anthropology* 19(2), 20-30.
- Kaepler, Adrienne L.  
 1994 Paradise regained: the role of Pacific museums in forging national identity. In Flora E. S. Kaplan (ed.) *Museums and the making of ourselves: the role of objects in national identity*, pp. 19-44. London: Leicester University Press.
- Kahn, Miriam  
 1995 Heterotopic dissonance in the museum representation of Pacific island cultures. *American anthropologist* 97(2), 324-338.
- Lee, Nan-young  
 1986 Museums in the Republic of Korea. *Museum* 149, 30-35.
- Prossler, Martin  
 1996 Museums and globalization. In Sharon Macdonald and Gordon Fyfe (eds) *Theorizing museums*, pp. 21-44. Oxford: Blackwell.
- Robertson, R.  
 1990 Mapping the global condition: globalization as the central concept. In M. Featherstone (ed.) *Global culture*. London: Sage.
- Schildkrout, Enid  
 1995 Museums and nationalism in Namibia. *Museum anthropology* 19(2), 65-77.
- Talbot, Frank H.  
 1995 Anthropology and the museum: cultures in conflict. In Tsong-yuan Lin (ed.) *Proceedings of the International Conference on Anthropology and the Museum*, pp. 1-8. Taipei: Dept. of Anthropology, Taiwan Museum.
- Thomas, Nicholas  
 1989 Material culture and colonial power: ethnological collecting and the establishment of colonial rule in Fiji. *Man* (N.S.) 24, 41-56.
- Todd, Loretta  
 1990 Notes on appropriation. *Parallogramme* 16(1), 24-32.
- Trigger, Bruce G.  
 1984 Alternative archaeologies: nativist, colonialist, imperialist. *Man* (N.S.) 19, 355-370.
- Zolberg, Vera  
 1996 Museums as contested sites of remembrance: the Enola Gay affair. In Sharon Macdonald and Gordon Fyfe (eds) *Theorizing museums*, pp. 69-82. Oxford: Blackwell.